人口減少に対応した観光と移住促進に関する研究

大　橋　美　幸

Ⅰ．はじめに

我が国の人口減少は、少子高齢化を伴う人口の微減から、高齢者人口の減少を伴う急激な人口減少に移りつつある[1)]。政策投資における選択と集中が言われる中で、消滅可能性市町村からの撤退も不安視されている[2)]。

総務省の調査によれば、人口減少により福島県等を除く全市区町村のうち３割に買物や移動等の生活に支障が生じている[3)]。バス、スーパー、ガソリンスタンド等の生活サービスの維持、移住対策や子育て支援、企業誘致、起業支援等を通じた人口減少を防ぐ施策が求められている。

移住対策は全国の半数の市町村で行われており、ウェブサイトでの情報提供、説明会や相談窓口、空き家バンクが比較的多く、一部で移住体験プログラムや就職情報提供、住宅改修費等の助成等も行われている。移住者数は変化なしが半数を占めるものの、増加傾向が４割近い[4)]。移住対策は人口減少局面において有効な方法の一つである。

東京在住者の４割が移住を考えており、Ｕターンや二地域居住を行ってみたい人が３割いる。理由はＵターン以外に、スローライフへの希望が多い。ただし、移住にあたり雇用、日常生活や交通の利便性に不安を感じられており、合わせて物価や住居費等の費用、医療・福祉の充実度等が移住を考える上でのポイントにあがっている[5)]。都市市民の３割が農山漁村への移住を希望しているが、仕事、日常生活や交通の利便性、医療機関等を問題点として

あげている[6)]。

ふるさと回帰支援センター相談者は30～60代まで幅広く、会社員が６割を占めている。移住先の条件として自然環境に次いで、就労の場があがっており、半数近くが企業等への就職を希望し、農業３割、自営業等の起業が１割である[7)]。

農山村のＵターンを含む転入者調査では、転入の理由として老親が気にかかる、先祖の家や土地を守る等の他に、仕事を始める、結婚等があがっている[8)]。移住を考える際に、仕事は重要な要素となっている。

医療や福祉に関しては、子育て支援が全国の７割の市町村で実施されており、子ども医療費の無料化、子育て世帯の家賃補助等が行われている[9)]。高齢者向けのケア付住宅を準備し、相乗りタクシー、買い物代行等の生活支援サービスを実施し、高齢者の移住を進める取り組みも行われている[10)]。

この中で、人口減少が顕著な北海道において、観光と移住促進の観点から可能性を探る調査を行った。北海道は移住希望先として2010年に都道府県の11位であったが、その後、ランクを下げている[7)]。北海道では今年３月に北海道新幹線が開業し、東京－新函館北斗（北斗市）が最短４時間10分で結ばれる。観光及び二地域居住や移住に肯定的な材料になると考えられる。

Ⅱ．調査方法

調査対象地域は、函館市、七飯町、奥尻町である。函館市は年間500万人が訪れる観光都市であり、その６割が北海道外からである。七飯町は大沼地区を中心に年間200万人近くが訪れるリゾート地であり、その６割が北海道外からである。奥尻町は年間３万人が訪れる離島であり、その２割が北海道外からである【表2. 1】。

函館市は日本創生会議が出した消滅可能性都市[11)]で中核都市の１位となった。人口は2010年の279, 127人から2040年に174, 769人になると推計されている。1000人を超える転出超過があり、毎年3000人前後の人口減少が続いてい

る。七飯町の人口は2010年に28,463人、2040年に21,558人になると推計されている。現在転入超過が続いているが、自然減が上回り、人口は微減している。七飯町は地区によって異なり、３つの地区のうち大沼地区はこれまで観光客の減少によって宿泊施設、土産店、レストラン、クリーニング店等が廃業し、人口減少を招いてきた[12]【表2.2、表2.3】。本町地区は変化なく、函館に通勤する人のベッドタウンである大中山地区で微増している。奥尻町の人口は2010年に3,033人、2040年に1,324人になると推計されており、日本創生会議の消滅可能性都市で全国４位となっている[11]。2014年度は３人の転入超過であったものの、自然減が上回り人口は減少している。

函館市で特に積極的な移住施策は取られておらず、移住相談窓口と移住者の集いが行われ、一定地区の転入後１年以内の中学校卒業までの子どもがいる世帯に対して１万５千円を上限とする家賃補助を行っている（所得制限あり）。七飯町は高校卒業までの子どもの医療費を無料にしており、別荘が建ち並ぶ大沼地区で転入者向けのサイトをもうけて暮らしや分譲地等の情報提供を行っている。奥尻町はワイナリー会社で葡萄農家の立ち上げ支援を行っており、他の農業・観光業等を含めて雇用がある。

函館市、七飯町、奥尻町において、外部からの転入意向、居住者の転出及び定住意向等の２方向の調査を行った。七飯町については大沼地区の移住者にインタビューを行った。

調査実施時期は2015年６～７月である。なお、2016年３月に北海道新幹線が開業し、函館市に隣市の新幹線駅からアクセス列車が走り、七飯町大沼地区近郊に新幹線新駅ができた。調査は新幹線開業の９か月前にあたる。同時期には函館市及び七飯町において関連イベント、東北・北関東で観光客誘致のプロモーションが行われていた。

外部からの転入意向について、函館市の駅前や観光地においてアンケート調査を行った。加えて、七飯町の大沼地区に立ち寄る定期観光バス乗客に七飯町についてアンケート調査を行った。奥尻町については、奥尻町内のホテ

ル宿泊客及び町外からのイベント参加者にアンケート調査を行った。

調査項目は、回答者基本属性（性別、年代、居住地）、これまでに当該地域に来た回数、当該地域の認知度及びイメージ、移住の可能性、移住地に求めるもの等である。

居住者の転出及び定住意向について、函館市において街頭アンケートを行った。調査項目は、回答者基本属性（性別、年代）、定住の状況、定住及び転居希望、転居希望者の理由等である。

合わせて、七飯町大沼地区の移住者に対してインタビューを行った。インタビュー項目は、回答者基本属性（性別、年代、職業）、移住年月、移住までの転居歴、移住の動機、移住時の経緯、現在の状況等である。

表2.1　観光の状況　　（2013年度　単位：千人）

	観光入込総数	内道外客	内道内客	内日帰客	内宿泊客
函館市	4,819.1	2,964.0	1,537.2	1,510.0	2,991.2
七飯町	1,980.6	1,167.5	610.2	1,712.0	65.7
奥尻町	32.5	7.3	25.1	0.7	31.7

表2.2　大沼地区の人口推移

	大沼地区	七飯町
2003年	2,752	29,087
2008年	2,613	29,107
2013年	2,364	28,712

表2.3　大沼地区の観光客数　　（単位：千人）

	観光客入込数	宿泊客延数
2000年	2417.3（七飯町2417.3）	154.5（七飯町154.5）
2005年	2068.7（七飯町2144.2）	112.8（七飯町112.9）

Ⅲ. 観光都市・函館市

1. 外部からの函館への転入意向

（1）回答者基本属性

道内188人、道外229人、計417人。道内は札幌市57人、北斗市24人、七飯町19人、江差町９人等である。道外は青森県51人、東京都25人、神奈川県17人、秋田県16人、岩手県15人、埼玉県９人等である。

男性215人(51.6％)、女性202人(48.4％)。道内・道外ともに、おおむね半数ずつくらいである【図表3.1】。

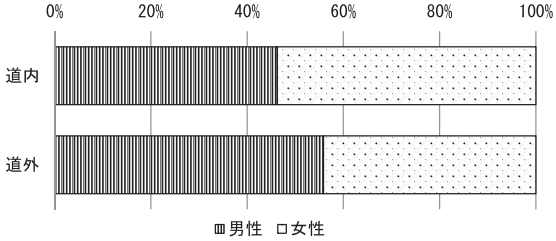
年代は、19歳以下71人(17.0％)、20代76人(18.2％)、30代70人(16.8％)、40代67人(16.1％)、50代64人(15.3％)、60代52人(12.5％)、70歳以上17人(4.1％)。道内・道外ともに全般的に幅広い年代にわたっている【図表3.2】。

家族構成は、単身127人(31.4％)、夫婦のみ126人(31.1％)、未成年の子どもと同居68人(16.8％)、他84人(20.7％)。単身、夫婦のみがそれぞれ３割である。道外・道外で差は見られない【図表3.3】。

函館に来た回数は、はじめて123人(29.4％)、２～３回117人(27.9％)、４～９回目69人(16.5％)、10回以上110人(26.3％)。道内は北斗市、七飯町等の函館近郊があるため、半数が10回以上になっている【図表3.4】。

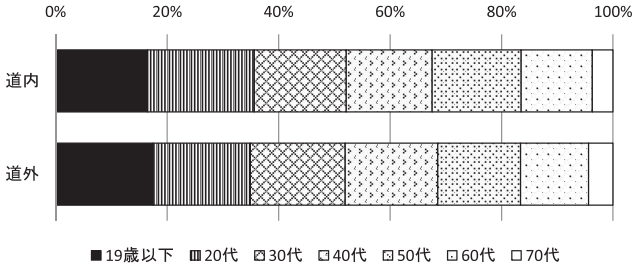
図表3.1　回答者基本属性（性別）

		居住地		合計
		道内	道外	
性別	男性	87	128	215
	女性	101	101	202
合計		188	229	417



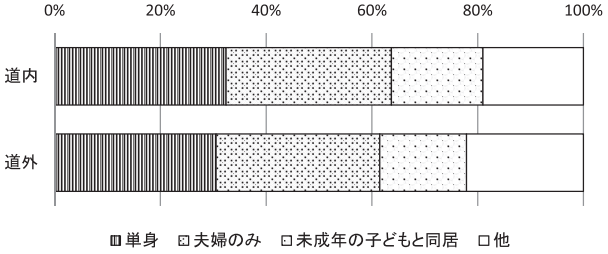
図表3.2　回答者基本属性（年代）

		居住地		合計
		道内	道外	
年代	19歳以下	31	40	71
	20代	36	40	76
	30代	31	39	70
	40代	29	38	67
	50代	30	34	64
	60代	24	28	52
	70代	7	10	17
合計		188	229	417



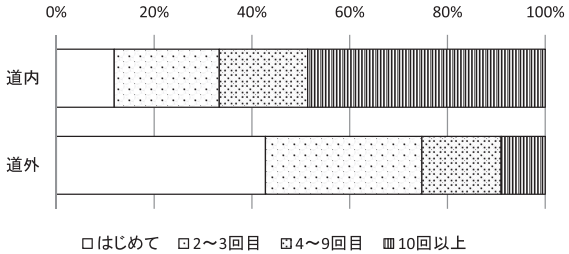
図表3.3　回答者基本属性（家族構成）

		居住地		合計
		道内	道外	
家族構成	単身	58	69	127
	夫婦のみ	56	70	126
	未成年の子どもと同居	31	37	68
	他	34	50	84
合計		179	226	405



図表3.4　回答者基本属性（函館に来た回数）

		居住地		合計
		道内	道外	
これまでに函館に来た回数	はじめて	21	95	116
	2～3回目	38	71	109
	4～9回目	32	36	68
	10回以上	86	20	106
合計		177	222	399



（２）函館市に対するイメージ

函館市に対するイメージを「きれい・おしゃれ」、「楽しそう」、「まわりの人がやさしそう」、「癒される」の４つについて、「そう思う」「ややそう思う」「あまりそう思わない」「そう思わない」の４段階で尋ねた。

きれい・おしゃれは、「そう思う」175人(43.3%)、「ややそう思う」177人(43.8%)、「あまりそう思わない」39人(9.7%)、「そう思わない」13人(3.2%)。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると９割近い。道内・道外であまり差は見られない【図表3.5】。

楽しそうは、「そう思う」135人(32.7%)、「ややそう思う」192人(46.5%)、「あまりそう思わない」72人(17.4%)、「そう思わない」14人(3.4%)。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると８割近い。道内・道外で差は見られない【図表3.6】。

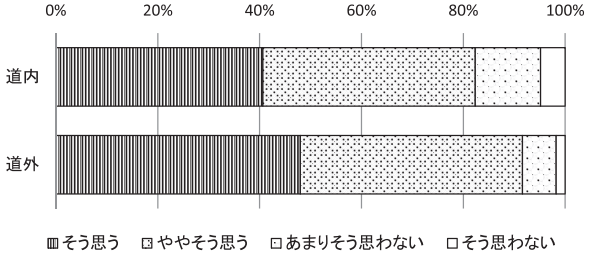
まわりの人がやさしそうは、「そう思う」170人(40.5%)、「ややそう思う」179人(42.6%)、「あまりそう思わない」54人(12.9%)、「そう思わない」17人(4.0%)。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると８割を超える。道内・道外で差は見られない【図表3.7】。

癒されるは、「そう思う」168人(40.6%)、「ややそう思う」166人(40.1%)、「あまりそう思わない」64人(15.5%)、「そう思わない」16人(3.9%)。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると８割を超える。道内・道外で差は見られない【図表3.8】。

函館市に対するイメージは、道内・道外ともに良好である。

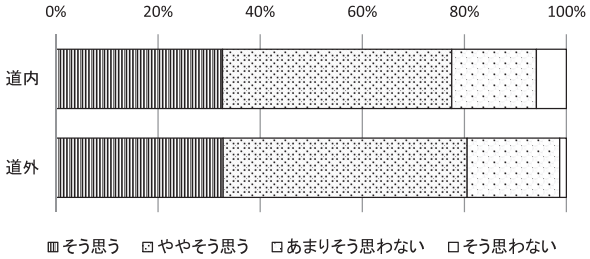
図表3.5　函館に対するイメージ「きれい・おしゃれ」

		居住地		合計
		道内	道外	
きれい・おしゃれ	そう思う	76	109	175
	ややそう思う	78	99	177
	あまりそう思わない	24	15	39
	そう思わない	9	4	13
合計		187	227	414



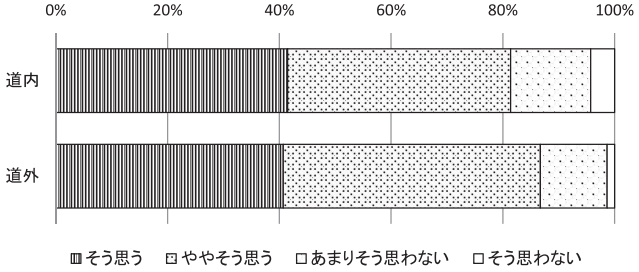
図表3.6　函館に対するイメージ「楽しそう」

		居住地		合計
		道内	道外	
楽しそう	そう思う	61	74	135
	ややそう思う	84	108	192
	あまりそう思わない	31	41	72
	そう思わない	11	3	14
合計		187	226	413



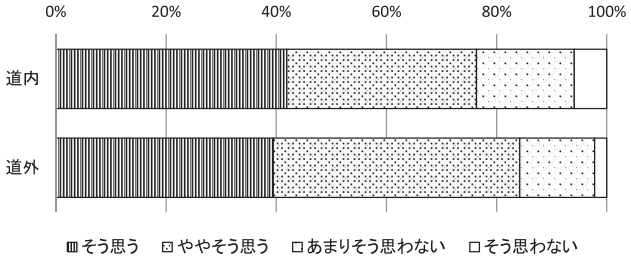
図表3.7　函館に対するイメージ「まわりの人がやさしそう」

		居住地		合計
		道内	道外	
まわりの人がやさしそう	そう思う	78	92	170
	ややそう思う	75	104	179
	あまりそう思わない	27	27	54
	そう思わない	8	3	17
合計		188	226	414



図表3.8　函館に対するイメージ「癒される」

		居住地		合計
		道内	道外	
癒される	そう思う	78	90	168
	ややそう思う	64	102	166
	あまりそう思わない	33	31	64
	そう思わない	11	5	16
合計		186	228	414



（３）函館市民以外の函館への移住意向等

函館市にまた来たいと思うか尋ねたところ、「そう思う」259人(63.5%)、「ややそう思う」111人(27.2%)、「あまりそう思わない」28人(6.9%)、「そう思わない」10人(2.5%)。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると９割である。遠方の道外からも再訪希望を持たれている【図表3.9】。前述の函館市に対するイメージ「きれい・おしゃれ」、「楽しそう」、「まわりの人がやさしそう」、「癒される」はいずれも関係があり、「そう思う」人で、函館市にまた来たいと思う人が多くなっていた。

函館に１週間以上滞在したいと思いますかと尋ねたところ、「そう思う」117人(28.9%)、「ややそう思う」129人(31.9%)、「あまりそう思わない」119人(29.4%)、「そう思わない」40人(9.9%)。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると６割になる。道内･道外で差は見られない【図表3.10】。前述の函館市に対するイメージ「きれい・おしゃれ」、「楽しそう」、「まわりの人がやさしそう」、「癒される」はいずれも関係があり、「そう思う」人で、函館に１週間以上滞在したいと思う人が多くなっていた。

函館に住みたいと思いますかと尋ねたところ、「そう思う」89人(22.2%)、「ややそう思う」123人(30.7%)、「あまりそう思わない」122人(30.4%)、「そう思わない」67人(16.7%)。「そう思う」と「ややそう思う」を合わせると半数を超える。道内・道外であまり差は見られない【図表3.11】。

函館への移住希望、函館への再訪希望、函館への１週間以上の滞在希望は関係があり、函館への再訪希望や１週間以上の滞在希望で「そう思う」と回答した人で、函館への移住希望が多くなっている【図表3.12、図表3.13】。性別による差は見られず、年代では19歳以下、60代・70歳以上で「あまりそう思わない」と「そう思わない」がやや多くなる【図表3.14】。家族構成による差は見られない。

「そう思う」、「ややそう思う」人の理由では、ゆっくりできる･居心地の良さ、自然が豊か、食べ物がおいしい、活気がある・買い物に便利、街並みが

きれい等の点が評価されている。気候が良いという意見もあり、函館市民の人柄への評価、知人が居る等の声もある【資料3.1】。

「あまりそう思わない」、「そう思わない」人の理由では、交通の便が悪い、活気がない・買い物に不便、気候が悪い等の意見がある。都会でない、騒がしすぎる・田舎が良いは両面から声がある【資料3.2】。

前述の函館市に対するイメージ「きれい・おしゃれ」、「楽しそう」、「まわりの人がやさしそう」、「癒される」はいずれも関係があり、「そう思う」人で、函館に住みたいと思う人が多くなっていた。

函館市以外に転居先の候補として考えている先がある人は360人のうち52人(14.4%)。函館に住みたいと思うかで「そう思う」、「ややそう思う」人は、北海道札幌市、旭川市、岩見沢市、知内市、八雲町、江差町をあげ、道外で東京都、埼玉県大宮市、宮城県仙台市、京都府、神戸市、長崎県、大分県別府市、沖縄県をあげている。函館に住みたいと思うかで「あまりそう思わない」、「そう思わない」人は、函館近郊の七飯町と合わせて札幌市、江差町、道外で東京都、千葉県、福岡県、宮城県仙台市、軽井沢、京都府、宮古島をあげている。札幌市、江差町、東京都、京都府は函館に住みたいと思うかどうかに関わらず、名前があがっている。

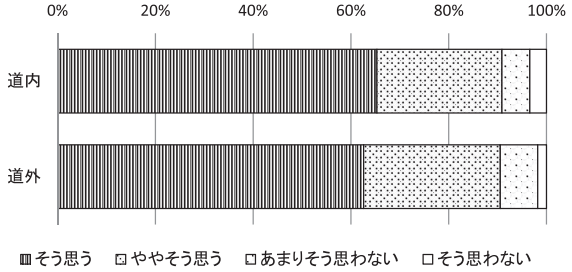
函館に住みたいと思うかで「そう思う」、「ややそう思う」と答えた人に、住むとすればどこが良いか尋ねたところ204人の複数回答で、西部地区（函館山・ベイエリア・元町の教会と坂道群等の周辺）52人（25.4%）、函館駅前(大門・朝市等の周辺)27人(13.2%)、五稜郭方面(五稜郭公園等の周辺)40人(19.5%)、湯の川方面（湯の川温泉等の周辺）36人(17.6%)、その他２人(0.2%)、わからない58人(28.2%) わからないを除くと、西部地区が最も多く、五稜郭方面、湯の川方面が続く。性別・年代・これまでに函館に来た回数による差は見られない。西部地区は道外の人、夫婦のみや未成年の子どもと同居している人にやや人気がある【図表3.15】。前述の函館に対するイメージ「癒される」で「そう思う」と答えた人で、西部地区をあげる人が多くな

っていた。

同様に函館に住みたいと思うかで「そう思う」、「ややそう思う」と答えた人に、住むとすれば不安な点は何か尋ねたところ211人の複数回答で、冬の気候72人(34.1%)、津波等の自然災害40人(19.2%)、仕事46人(22.1%)、交通の利便性23人（11.0%)、教育５人（2.4%)、医療25人（12.0%)、治安12人(5.8%)、その他２人(0.2%)、わからない28人(13.5%)、特にない35人(16.5%)。冬の気候が１／３であり、仕事、津波等の自然災害が続く。性別・年代・これまでに函館に来た回数による差は見られない。冬の気候への不安は道外で高くなっている【図表3.16】。

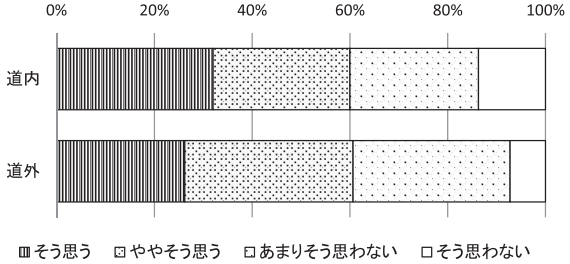
図表3.9　函館への再訪希望

		居住地		合計
		道内	道外	
また来たいと思うか	そう思う	115	139	254
	ややそう思う	45	62	107
	あまりそう思わない	10	17	27
	そう思わない	6	4	10
合計		176	222	398



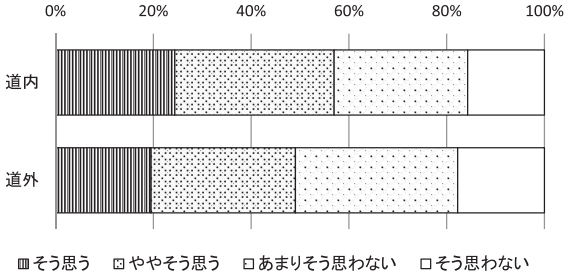
図表3.10　函館への１週間以上の滞在希望

		居住地		合計
		道内	道外	
１週間以上滞在したいと思うか	そう思う	56	58	114
	ややそう思う	49	76	125
	あまりそう思わない	46	71	117
	そう思わない	24	16	40
合計		175	221	396



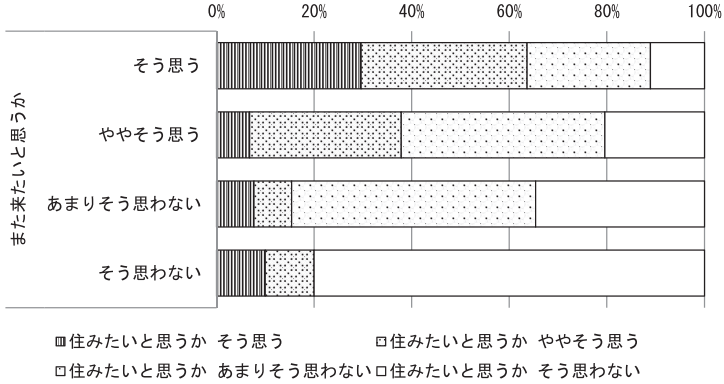
図表3.11　函館への移住希望

		居住地		合計
		道内	道外	
住みたいと思うか	そう思う	42	43	85
	ややそう思う	56	65	121
	あまりそう思わない	47	73	120
	そう思わない	27	39	66
合計		172	220	392



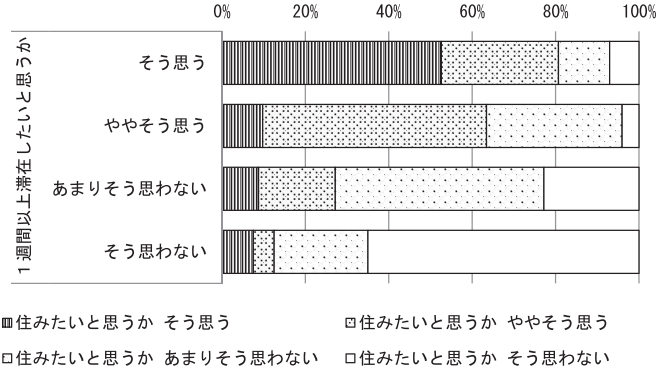
図表3. 12　函館への再訪希望と移住希望

		住みたいと思うか				合計
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	
住みたいと思うか	そう思う	75	86	64	28	253
	ややそう思う	7	32	43	21	103
	あまりそう思わない	2	2	13	9	26
	そう思わない	1	1	0	8	10
合計		85	121	120	66	392



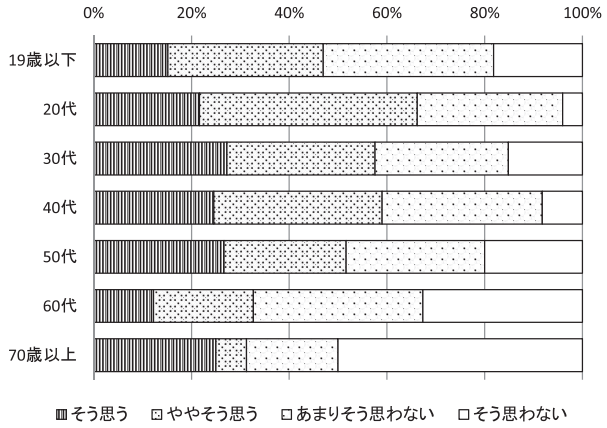
図表3.13　函館への１週間以上の滞在希望と移住希望

		住みたいと思うか				合計
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	
１週間以上滞在したいと思うか	そう思う	60	32	14	8	114
	ややそう思う	12	66	40	5	123
	あまりそう思わない	10	21	57	26	114
	そう思わない	3	2	9	26	40
合計		85	121	120	65	391



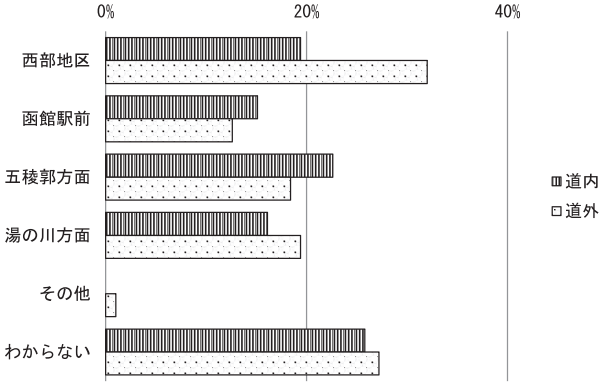
図表3.14　年代別、函館への移住希望

		住みたいと思うか				合計
		そう思う	ややそう思う	あまりそう思わない	そう思わない	
年代	19歳以下	10	21	23	12	66
	20代	16	33	22	3	74
	30代	18	20	18	10	66
	40代	15	21	20	5	61
	50代	16	15	17	12	60
	60代	6	10	17	16	49
	70歳以上	4	1	3	8	16
合計		85	121	120	66	392



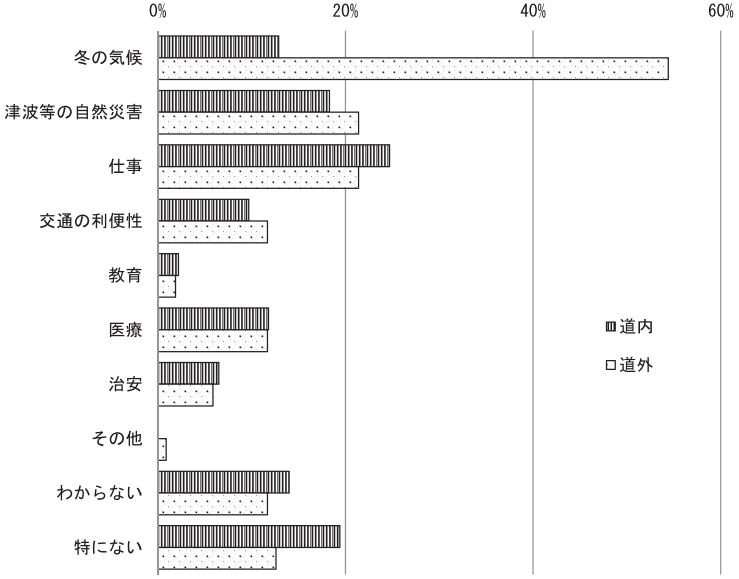
図表3.15　函館への移住希望地区

		居住地		合計
		道内 n=93	道外 n=103	
函館に住むとすればどこが良いですか	西部地区	18	33	51
	函館駅前	14	13	27
	五稜郭方面	21	19	40
	湯の川方面	15	20	35
	その他	0	1	1
	わからない	24	28	52



図表3.16　函館への移住に向けて不安な点

		居住地		合計
		道内 n=93	道外 n=103	
函館に住むとすれば、不安な点は何ですか	冬の気候	12	56	68
	津波等の自然災害	17	22	39
	仕事	23	22	45
	交通の利便性	9	12	21
	教育	2	2	4
	医療	11	12	23
	治安	6	6	12
	その他	0	2	2
	わからない	13	12	25
	特にない	18	13	31



資料3.1　函館への移住希望者の理由

自由記入より一部抜粋

【交通の便が良い】

・ＪＲやバスがいっぱいあるから交通に便利だと思う

【教育環境が良い】

・子供の教育環境

【ゆっくりできる、居心地が良い】

・おちつく
・落ち着く
・おちつくから
・ゆっくりできる街
・ゆっくりできそうだから
・老後にゆったりすごせそう、別荘地にしたい感じ
・時間の流れがゆっくりとしている
・本当に心が癒される
・穏やかな街だと思うから
・雰囲気が良い
・心地よかった
・居心地
・気分がいい

【自然豊か】

・海や自然が豊富にある
・自然が豊か

・海、山等あり、住みやすそう
・海が近いから
・海が好き
・海と港の持つイメージが斬新です
・空気がおいしい、景色がきれい
・空気がきれいで落ち着く
・都会すぎないところが良いから
・静か

【食べ物がおいしい】
・海産物がおいしい
・海産物がおいしかった
・食べ物がおいしそう
・食べ物がおいしい
・海や山の幸が食べられるから
・お店がたくさんある

【活気がある、買い物に便利】
・デパートとかおいしいご飯屋さんがたくさんあるから
・にぎやかでいい街だと思う
・買い物が便利
・観光地で活気がある
・おもしろそう、活気があるから
・結構、都会だから
・現在地より発展しているように思える
・楽しそう
・楽しそうだから

・観光地が多くて楽しそう

【街並みがきれい】
・街のつくりが都会的
・建物がきれい
・街並みがきれい
・街並みがよくて住みやすそう
・キレイ
・きれいな街だから
・とてもきれいな街だから
・きれいだから

【家賃が安い】
・借家が安い

【気候が良い】
・気候が良い
・気候が穏やかな感じがするから
・雪が少ないから
・暖かい

【函館の人の人柄】
・函館の人が明るく楽しかったから
・優しい

【近くに住んでいる、知人が居る】
・愛着がある

・家族が居るから
・家族が住んでいるから
・母の故郷だから
・友人が多いから
・近いから
・住んだほうが遊びに来るより安いから

資料3.2　函館に移住を希望しない人の理由

自由記入より一部抜粋

【仕事がない】
・仕事が北海道ではないため
・働く場所が少ないような気がする

【交通の便が悪い】
・インフラが不十分、交通に不便
・交通が不便
・自分が住んでいるところより便利が悪そうだから
・交通の便が現住所に比べると悪すぎる
・移動に時間とお金がかかりそう
・交通の便が悪そう

【教育環境が悪い】
・教育環境がよろしくない

【活気がない、買い物に不便】
・街に生活感があまりない
・お店がすくない
・買い物が不便
・買い物が微妙
・周りに何もない
・坂が多く、店に行きにくい
・さびれてきたと思う
・遊ぶところがない
・遊ぶ場所がない
・暗い
・活気がなかった
・楽しくなかった

【都会ではない】
・もう少し都会が良い
・都心部に遠いから
・意外と都会でなく人が少ない

【騒がしすぎる、田舎が良い】
・職場であって、住居としては騒がしい
・静かなところに住みたいから
・老人には人が多すぎる
・車の通り多い
・車が多いから
・田舎がいいから

【街並みがきれいでない】
・ぐちゃぐちゃしている
・様々な建物がごちゃごちゃしている
・ゴミゴミしている

【家賃が高い】
・住宅費が高そう

【気候が悪い】
・寒い
・冬寒そう
・冬が寒い
・基本的に寒いの苦手
・寒い、冬やばそう
・気温とかが地元と違うから
・風が強そうだから

【観光で訪れたい】
・一日でいい
・たまに来たい
・たまに来るのがいい
・観光地で、住む環境としてはいまいち
・観光地だから住むほどではない
・観光で来たい
・旅行だから良いと思います
・旅行で来るのがいいから
・遊びに来る程度でいい

・観光客が多い

【他に住みたいところがある】
・他に住みたいところがある
・他に住みたいから

【現在住んでいる場所に住み続けたい】
・愛着がわかないから
・自分の巣でいる地域に愛着がある
・地元がいい
・地元が気に入っているから
・地元が好きなので
・地元に愛着を感じている
・急に他の街を好きになり、住みたいという感情が浮かばない
・現在地に住みなれてしまったため
・住み慣れたところがいいから
・住みなれたところが安心
・現在の居住区に満足しているから
・今時点の暮らしがあるから
・持ち家がある
・持ち家があるから
・家がある

（4）これまでの転居時の情報収集先

これまでの転居歴は「生まれてからずっと同じ市区町村に居住（市内転居を含む）」194人(48.9%)、「現在の市町村の出身で一度離れてまた戻ってきた(Uターン)」61人(15.4%)、「他から現在の市町村に転居してきた」142人(35.8%)。道内・道外ともに転居歴があるのは半数くらいである【図表3.17】。

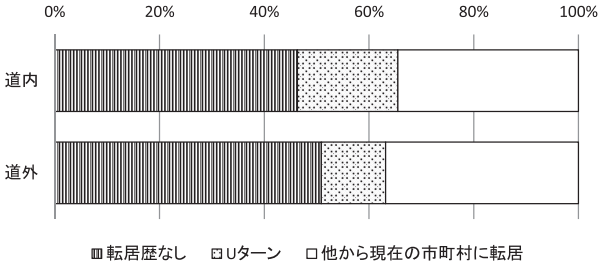
転居歴がある人に転居前にどのように情報を収集したか尋ねたところ198人の複数回答で、「不動産店・住宅販売店」33人(16.7%)、「現在自治体のＨＰ」３人(1.5%)、「移住情報サイト」５人(2.5%)、「その他のインターネット」10人(5.1%)、「移住フェア等のイベント」２人(1.0%)、「移住専門誌」３人(1.5%)、「自治体の移住相談窓口」０人(0.0%)、「会社・就職先」53人(26.8%)、「家族・親族」27人(13.6%)、「知人・友人」14人(7.1%)、「ふるさとで知っていた」11人(5.6%)、「近くに住んでいたので知っていた」11人(5.6%)、「観光等で行ったことがあった」４人(2.0%)、「その他」２人(1.0%)、「特に収集していない」34人(17.2%)。「その他」は学校等であった。「会社・就職先」が最も多く、「不動産店・住宅販売店」、「家族・親族」が続く。道内・道外で差は見られない【図表3.18】。

「会社・就職先」は男性、単身でやや多い。「家族・親族」は19歳以下でやや多い。「ふるさとで知っていた」は幅広い年代にわたっている。

転居歴がある人に現在地の市町村から受けた支援があるか尋ねたところ199人の複数回答で、「移住体験プログラム」３人(1.5%)、「就職や起業に対する支援」２人(1.0%)、「空き家の紹介」３人(1.5%)、「土地取得や新築・家賃補助等の助成」１人(0.5%)、「その他」１人(0.5%)。一部で「空き家の紹介」があり、道内で「移住体験プログラム」が行われている【図表3.19】。

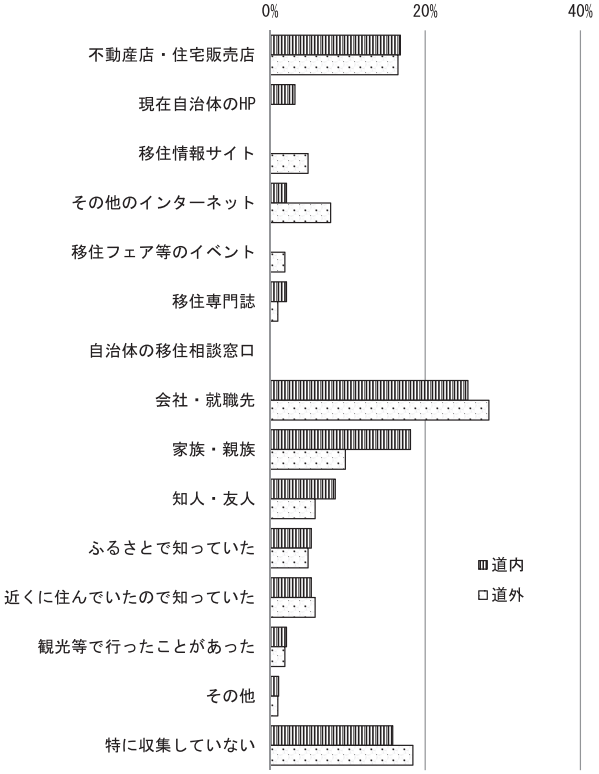
図表3. 17　これまでの転居歴

		居住地		合計
		道内	道外	
居住・転居の状況	転居歴なし	82	112	194
	Uターン	34	27	61
	他から現在の市町村に転居	61	81	142
合計		177	220	297



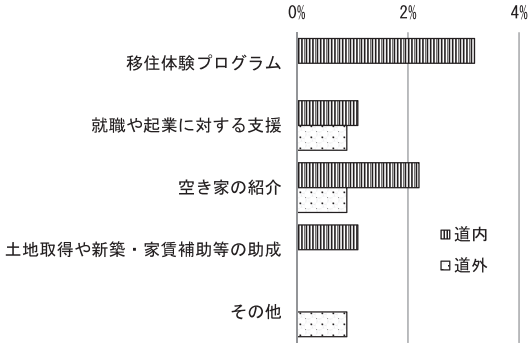
図表3. 18　転居時の情報収集先

		居住地		合計
		道内 n=95	道外 n=103	
転居前にどのように情報を収集しましたか	不動産店・住宅販売店	16	17	33
	現在自治体の HP	3	0	3
	移住情報サイト	0	5	5
	その他のインターネット	2	8	10
	移住フェア等のイベント	0	2	2
	移住専門誌	2	1	3
	自治体の移住相談窓口	0	0	0
	会社・就職先	24	29	53
	家族・親族	17	10	27
	知人・友人	8	6	14
	ふるさとで知っていた	6	5	11
	近くに住んでいたので知っていた	5	6	11
	観光等で行ったことがあった	2	2	4
	その他	1	1	2
	特に収集していない	15	19	34


0%
20%
40%
不動産店・住宅販売店
現在自治体のHP
移住情報サイト
その他のインターネット
移住フェア等のイベント
移住専門誌
自治体の移住相談窓口
会社・就職先
家族・親族
知人・友人
ふるさとで知っていた
近くに住んでいたので知っていた
観光等で行ったことがあった
その他
特に収集していない
道内
道外

図表3.19　転居前後の市町村からの支援

		居住地		合計
		道内 n=93	道外 n=106	
転居前後に現在の市町村から受けた支援	移住体験プログラム	3	0	3
	就職や起業に対する支援	1	1	2
	空き家の紹介	2	1	3
	土地取得や新築・家賃補助等の助成	1	0	1
	その他	0	1	1



（5）転居意向

現在の市町村に住み続けたいと思うか尋ねたところ、「住み続けたい」174人（44.5%）、「どちらかと言えば住み続けたい」143人（36.6%）、「どちらかと言えば住み続けたくない」19人（4.9%）、「将来、他の市町村に引っ越したい」55人（14.1%）。「住み続けたい」と「どちらかと言えば住み続けたい」を合わせると8割である。道内・道外で差は見られない【図表3.20】。

性別による差は見られない。「将来、他の市町村に引っ越したい」は19歳以下、20代でやや多くなっている。

引っ越すとすれば何年後くらいか尋ねたところ、「1年以内」14人(4.0%)、「5年以内」57人(16.3%)、「10年以内」26人(7.4%)、「10年以上」14人(4.0%)、「わからない」238人(68.2%)。わからないが7割であるが、「1年以内」と「5年以内」を合わせると2割になる。道内・道外で差は見られない【図表3.21】。19歳以下、20代で「5年以内」の人が多くなっている。

当然のことながら現在地の転居意向と関係があり、「将来、他の市町村に引っ越したい」人で5年以内の人が多かった。逆に「住み続けたい」人の中にも転居予定者がおり、意向と実際に食い違いがあることがわかる【図表3.22】。

現在の市町村に「どちらかと言えば住み続けたくない」、「将来、他の市町村に引っ越したい」と回答しており、かつ函館に住みたいと思っている（住みたいと思うかで「そう思う」、「ややそう思う」）人は、道内164人のうち24人(14.6%)、道外204人のうち18人(8.8%)。道内の15%、道外1割弱は、函館に移住する可能性がある。

道内では札幌市54人のうち8人（14.8%）、北斗市・七飯町・木古内町38人のうち4人（10.5%）。道外では東北地方84人のうち7人（8.3%）、首都圏（東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県）55人のうち2人（3.6%）である【図3.23】。

男性188人のうち19人（10.1%）、女性180人のうち23人（12.8%）。性別によって差は見られない【図3.24】。19歳以下60人のうち4人（6.7%）、20代73

人のうち16人（21.9％）、30代61人のうち７人（11.5％）、40代57人のうち６人（10.5％）、50代56人のうち７人（12.5％）、60代46人のうち１人（2.2％）、70代15人のうち１人（6.7％）【図3.25】。20代が若干多く、就職先として函館への移住の可能性がある。家族構成では、単身115人のうち20人（17.4％）、夫婦のみ112人のうち８人（7.1％）、未成年の子どもと同居57人のうち６人（10.5％）、その他72人のうち７人（9.7％）。20代が若干多いため、単身が若干多いが、家族構成による差は見られない。道内・道外で性別、年代、家族構成による差は見られない。

現在の市町村に「どちらかと言えば住み続けたくない」、「将来、他の市町村に引っ越したい」人で、かつ函館に住みたいと思っている40人に、函館で住むとすればどこが良いか尋ねると西部地区（函館山・ベイエリア・元町の教会と坂道群等の周辺）10人（25.0％）、函館駅前（大門･朝市等の周辺）６人（12.5％）、五稜郭方面（五稜郭公園等の周辺）５人（12.5％）、湯の川方面（湯の川温泉等の周辺）４人（10.0％）、その他０人（0.0％）、わからない14人（35.0％）。わからないが多いが、西部地区が人気である。

現在の市町村に「どちらかと言えば住み続けたくない」、「将来、他の市町村に引っ越したい」人で、かつ函館に住みたいと思っている人に40人に、函館に住むとすれば不安な点を尋ねると、冬の気候12人（30.0％）、津波等の自然災害４人（10.0％）、仕事10人（25.0％）、交通の利便性５人（12.5％）、教育２人（5.0％）、医療６人（15.0％）、治安３人（7.5％）、その他１人（2.5％）、わからない４人（10.0％）、特にない４人（10.0％）。冬の気候が多く、仕事、交通の利便性が続く。

現在の市町村に「どちらかと言えば住み続けたくない」、「将来、他の市町村に引っ越したい」人で、かつ函館に住みたいと思っている17人に、函館以外の移住候補地を尋ねると、道内では北斗市、江差町、今金町、知内町、札幌市等、道外では青森県、秋田県、宮城県、千葉県、大阪府等であった。

10年以内に転居予定がある人で、かつ函館に住みたいと思っている（住み

たいと思うかで「そう思う」、「ややそう思う」）のは道内145人のうち30人（20.7％）、道外187人のうち27人（14.4％）。道内の２割、道外の１割は、函館に移住する可能性がある。

詳しく見ると、道内は、札幌市50人のうち11人（22.0％）、七飯町・北斗市・木古内町36人のうち２人（5.6％）。札幌市が多く、函館近郊は少ない。道外は、東北地方79人のうち12人（15.2％）、首都圏（東京都、神奈川県、千葉県、埼玉県）51人のうち５人（9.8％）、東北地方が15％、首都圏は１割である【図3.26】。

男性188人のうち27人（14.4％）、女性180人のうち30人（16.7％）【図3.27】。性別によって差は見られない。19歳以下60人のうち11人（18.3％）、20代73人のうち17人（23.3％）、30代61人のうち10人（16.4％）、40代57人のうち６人（10.5％）、50代56人のうち11人（19.6％）、60代46人のうち１人（2.2％）、70代15人のうち１人（6.7％）【図3.28】。20代前後と50代が若干多い。20代前後は進学、結婚、就職、50代は定年退職後の居住地として函館に移住する可能性がある。家族構成では、単身115人のうち20人（17.4％）、夫婦のみ112人のうち８人（7.1％）、未成年の子どもと同居57人のうち６人（10.5％）、その他72人のうち７人（9.7％）。20代が若干多いため、単身が若干多いが、家族構成による差は見られない。道内・道外で性別、年代、家族構成による差は見られない。

現在の市町村に「どちらかと言えば住み続けたくない」、「将来、他の市町村に引っ越したい」人で、かつ函館に住みたいと思っている55人に、函館で住むとすればどこが良いか尋ねると西部地区（函館山・ベイエリア・元町の教会と坂道群等の周辺）11人（20.0％）、函館駅前（大門･朝市等の周辺）７人（12.7％）、五稜郭方面（五稜郭公園等の周辺）９人（16.4％）、湯の川方面（湯の川温泉等の周辺）12人（21.8％）、その他０人（0.0％）、わからない16人（29.1％）。わからないが多いが、湯の川方面、西部地区が人気である。

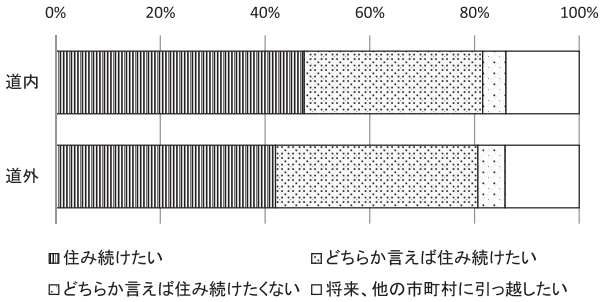
現在の市町村に「どちらかと言えば住み続けたくない」、「将来、他の市町

村に引っ越したい」人で、かつ函館に住みたいと思っている55人に、函館に住むとすれば不安な点を尋ねると、冬の気候21人（38.2％）、津波等の自然災害６人（10.9％）、仕事11人（20.0％）、交通の利便性６人（10.9％）、教育１人（1.8％）、医療６人（10.9％）、治安２人（3.6％）、その他０人（0.0％）、わからない９人（16.4％）、特にない８人（14.5％）。冬の気候が多く、仕事が続く。

現在の市町村に「どちらかと言えば住み続けたくない」、「将来、他の市町村に引っ越したい」人で、かつ函館に住みたいと思っている21人に、函館以外の移住候補地を尋ねると、道内では北斗市、江差町、今金町、知内町、森町、札幌市、小樽市、余市町、帯広市等、道外では青森県、山形県、秋田県、宮城県、神奈川県、埼玉県、千葉県、大阪府、東京都等であった。

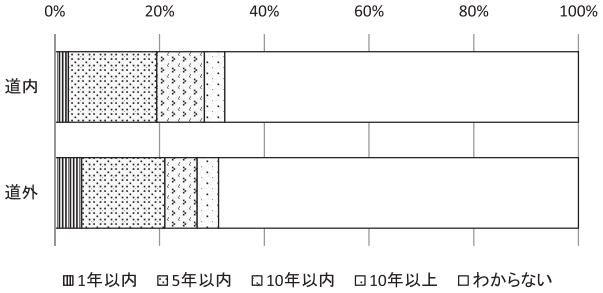
図表3.20　転居意向

		居住地		合計
		道内	道外	
現在の市町村に住み続けたいか	住み続けたい	85	89	174
	どちらか言えば住み続けたい	61	82	143
	どちらか言えば住み続けたくない	8	11	19
	将来、他の市町村に引っ越したい	25	30	55
合計		179	212	391



図表3. 21　転居予定

		居住地		合計
		道内	道外	
引っ越すとしたら何年後か	1年以内	4	10	14
	5年以内	26	31	57
	10年以内	14	12	26
	10年以上	6	8	14
	わからない	104	134	238
合計		154	195	349



図表3.22　転居意向と転居予定

		住み続けたいか				合計
		住み続けたい	どちらかと言えば住み続けたい	どちらかと言えば住み続けたくない	将来、他の市町村に引っ越したい	
引っ越すとしたら何年後か	1年以内	1	4	2	7	14
	5年以内	13	19	5	20	57
	10年以内	5	10	3	7	25
	10年以上	5	5	1	2	13
	わからない	120	92	8	17	237
合計		144	130	19	53	346

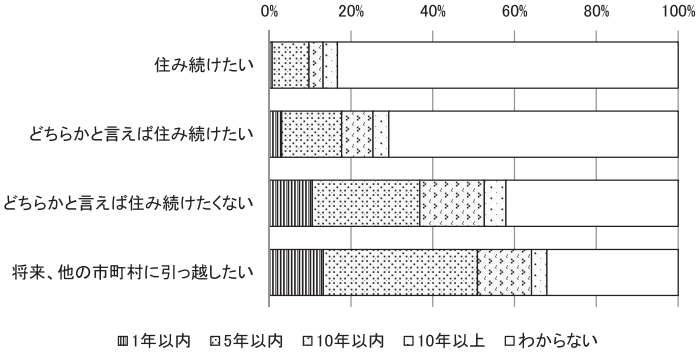


図3.23　現在地からの転居希望で、函館への移住希望者の割合

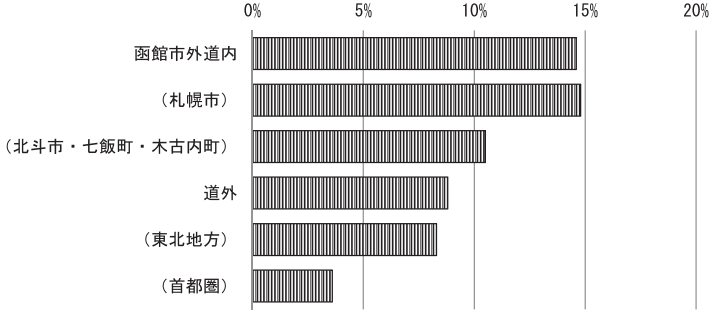


図3. 24　性別による現在地からの転居希望で函館への移住希望者の割合

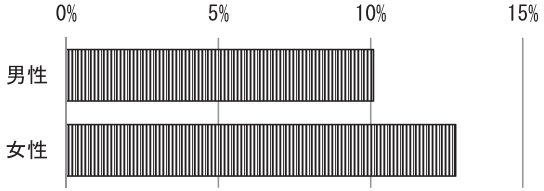


図3. 25　年代別、現在地からの転居希望で函館への移住希望者の割合

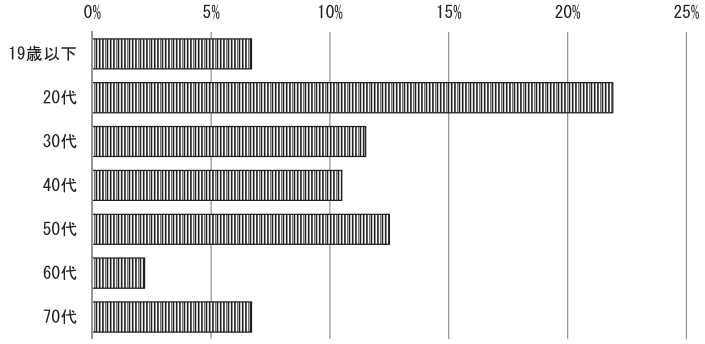


図3. 26　10年以内転居予定で、函館への移住希望者の割合

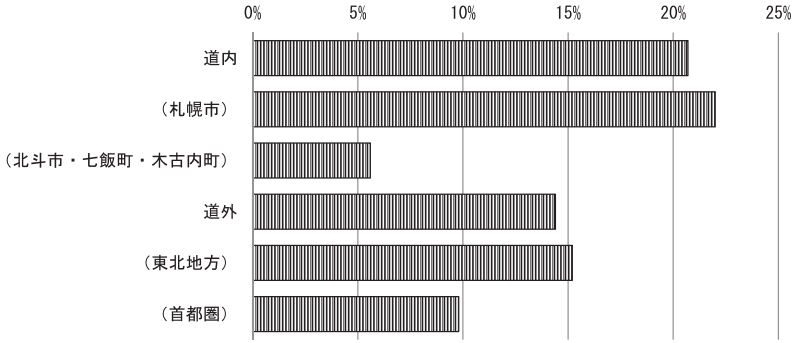


図3.27　性別による10年以内転居予定で、函館への移住希望者の割合

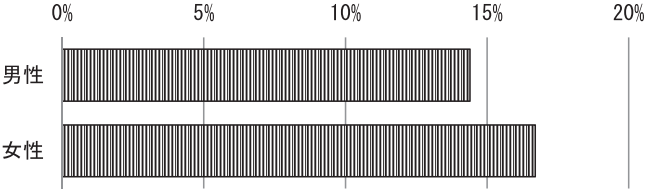
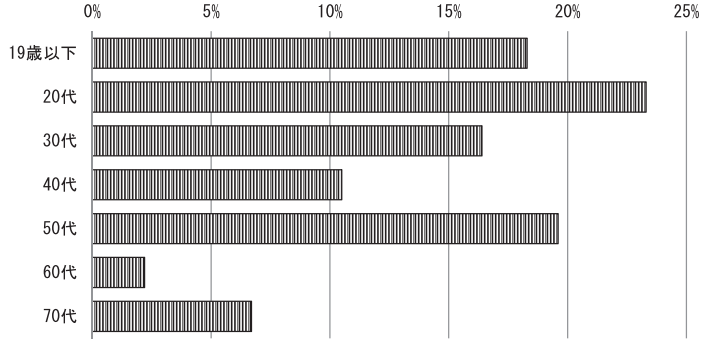


図3.28　年代別、10年以内転居予定で、函館への移住希望者の割合



2. 函館市民の転出及び定住意向

（1）回答者基本属性

回収数834。

男性484人（58.3%）、女性346人（41.7%）。男性が6割である【図3.29】。年代は、19歳以下251人（32.4%）、20代126人（16.3%）、30代101人（13.0%）、40代105人（13.6%）、50代104人（13.4%）、60代35人（4.5%）、70歳以上52人（6.7%）。19歳以下が3割、20代等が続く。70代まで幅広い年代にわたっている【図3.30】。

家族構成は、単身330人（38.0%）、夫婦のみ179人（20.6%）、未成年の子どもと同居197人（22.7%）、他163人（18.8%）。19歳以下、20代等が比較的多いため、単身や未成年の子どもと同居が多くなっている【図3.31】。

これまでの転居歴は、生まれてからずっと函館市内531人（65.1%）、一度函館を離れて戻ってきたUターン94人（11.5%）、他市町村から函館市に転居191人（23.4%）。2／3近くに転居歴がない【図3.32】。

図3.29　回答者基本属性（性別）

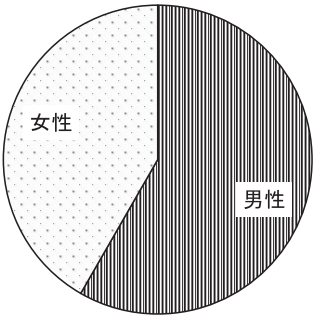


図3.30　回答者基本属性（年代）

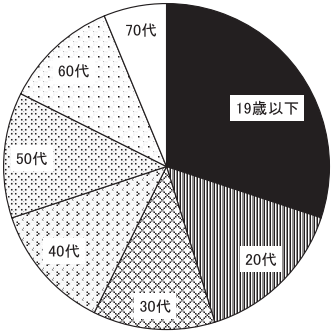


図3.31　回答者基本属性（家族構成）

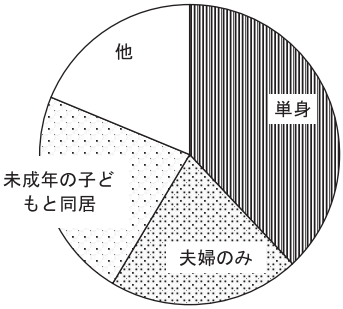
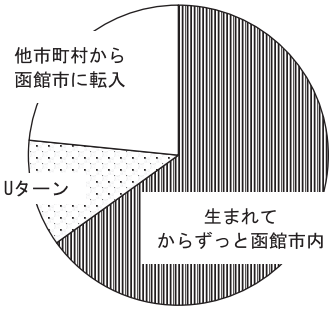


図3.32　これまでの転居歴



（２）定住意向とその理由

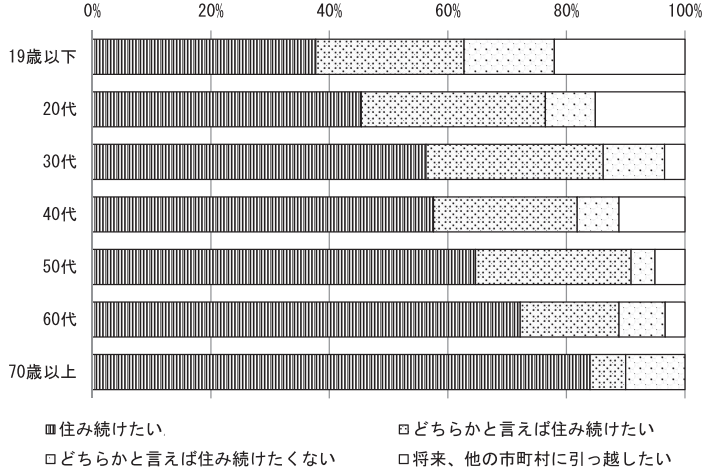
函館市に住み続けたいと思うか尋ねたところ、「住み続けたい」420人（53.8％）、「どちらかと言えば住み続けたい」190人（24.4％）、「どちらかと言えば住み続けたくない」78人（10.0％）、「将来、他の市町村に引っ越したい」92人（11.8％）。「住み続けたい」と「どちらかと言えば住み続けたい」を合わせると８割近い。

性別による差は見られない。「将来、他の市町村に引っ越したい」は19歳以下でやや多く、逆に「住み続けたい」は高齢者ほど多くなっている【図表3.33】。

「住み続けたい」、「どちらかと言えば住み続けたい」と回答した611人に理由を３つまであげてもらうと、「買い物が便利」215人（35.2％）、「市内の移動（公共交通）が便利」125人（20.5％）、「市外への移動（公共交通）が便利」41人（6.7％）、「道路事情が良い」50人（8.1％）、「医療や福祉体制が充実している」83人（13.6％）、「子育て支援が充実している」39人（6.3％）、「教育環境が良い」41人（6.7％）、「町並みが良い」209人（34.2％）、「自然が多い」221人（36.2％）、「魅力的な職場がある」45人（7.4％）、「近所づきあいが良い」122人（20.0％）、「余暇が楽しめるから」48人（7.9％）、「愛着があるから」220人（36.0％）、「治安が良いから」45人（7.4％）、「その他」11人（18.0％）。「その他」には、持家だから、親がいるから、慣れ等があった。「自然が多い」、「愛着があるから」、「買物が便利」、「町並みが良い」が３割を超えている。年代別にあまり差は見られない【図表3.34】。

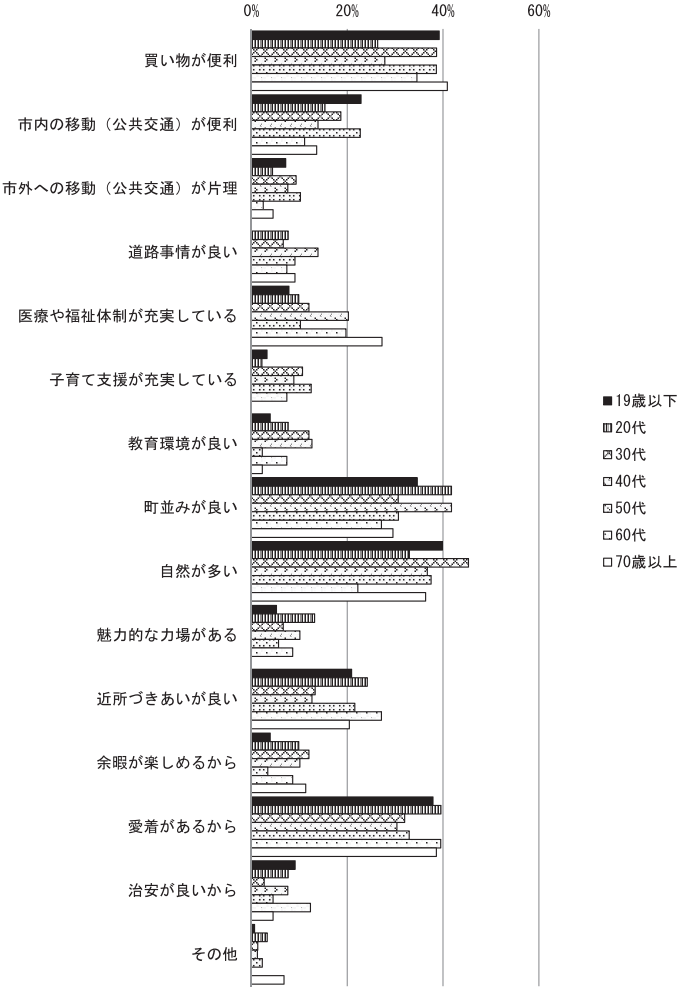
図表3.33　年代別の定住意向

		住み続けたいか				合計
		住み続けたい	どちらかと言えば住み続けたい	どちらかと言えば住み続けたくない	将来、他の市町村に引っ越したい	
年代	19歳以下	89	59	36	52	236
	20代	54	37	10	18	119
	30代	49	26	9	3	87
	40代	57	24	7	11	99
	50代	64	26	4	5	99
	60代	65	15	7	3	90
	70歳以上	42	3	5	0	50
合計		420	190	78	92	780



図表3. 34　年代別の定住意向の理由

		年代							合計
		19歳以下 n=153	20代 n=91	30代 n=75	40代 n=79	50代 n=88	60代 n=81	70歳以上 n=44	
「住み続けたい」「どちらかと言えば住み続けたい」理由	買い物が便利	60	24	29	22	34	28	18	215
	市内の移動（公共交通）が便利	35	14	14	11	20	9	6	125
	市外への移動（公共交通）が便利	11	4	7	6	9	2	2	41
	道路事情が良い	9	7	5	11	8	6	4	50
	医療や福祉体制が充実している	12	9	9	16	9	16	12	83
	子育て支援が充実している	5	2	8	7	11	6	0	39
	教育環境が良い	6	7	9	10	2	6	1	41
	町並みが良い	53	38	23	33	27	22	13	209
	自然が多い	61	30	34	29	33	18	16	221
	魅力的な力場がある	8	12	5	8	5	7	0	45
	近所づきあいが良い	32	22	10	10	19	22	9	122
	余暇が楽しめるから	6	9	9	8	3	7	5	48
	愛着があるから	58	36	24	24	29	32	17	220
	治安が良いから	14	7	2	6	4	10	2	45
	その他	1	3	1	1	2	0	3	11


0%
20%
40%
60%
買い物が便利
市内の移動（公共交通）が便利
市外への移動（公共交通）が片理
道路事情が良い
医療や福祉体制が充実している
子育て支援が充実している
教育環境が良い
町並みが良い
自然が多い
魅力的な力場がある
近所づきあいが良い
余暇が楽しめるから
愛着があるから
治安が良いから
その他
19歳以下
20代
30代
40代
50代
60代
70歳以上

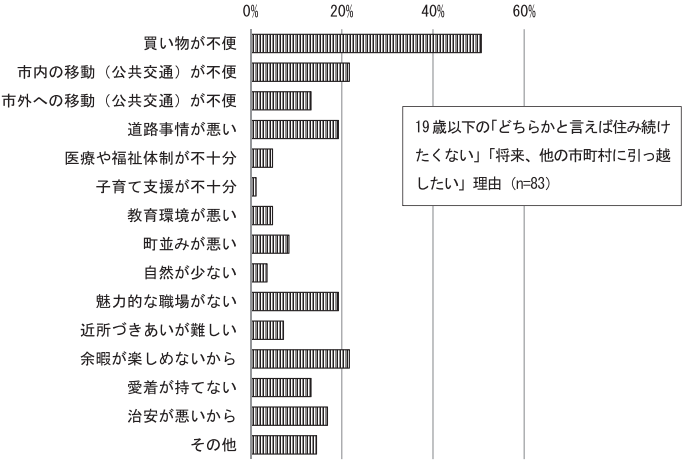
（3）転居意向とその理由

「どちらかと言えば住み続けたくない」、「将来、他の市町村に引っ越したい」と回答した163人に理由を３つまであげてもらうと、「買い物が不便」68人（41.7％）、「市内の移動（公共交通）が不便」45人（27.6％）、「市外への移動（公共交通）が不便」24人（14.7％）、「道路事情が悪い」33人（20.2％）、「医療や福祉体制が不十分」14人（8.6％）、「子育て支援が不十分」８人（4.9％）、「教育環境が悪い」９人（5.5％）、「町並みが悪い」10人（6.1％）、「自然が少ない」10人（6.1％）、「魅力的な職場がない」35人（21.5％）、「近所づきあいが難しい」９人（5.5％）、「余暇が楽しめないから」30人（18.4％）、「愛着を持てないから」19人（11.7％）、「治安が悪いから」21人（12.9％）、「その他」24人（14.7％）。「買い物が不便」が４割、「市内の移動（公共交通）が不便」、「魅力的な職場がない」等が続く。「その他」には持家が他にある、地元に帰る等があった。性別による差は見られない。年代別に見てもあまり差は見られない【図表3.35】。

引っ越すとすれば何年後くらいか尋ねたところ、「１年以内」13人（8.4％）、「５年以内」59人（38.1％）、「10年以内」17人（11.0％）、「10年以上」４人（2.6％）、「わからない」62人（40.0％）。わからないが４割であるが、「１年以内」と「５年以内」を合わせると半数近い。転居意向者が比較的多い19歳以下で見ても同じである【図表3.36】。

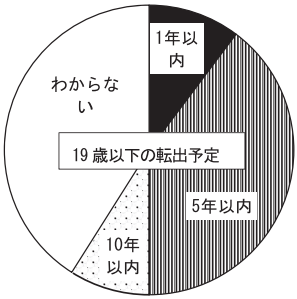
図表3.35　年代別の転出意向の理由

		年代							合計
		19歳以下 n=83	20代 n=28	30代 n=13	40代 n=18	50代 n= 7	60代 n=10	70歳以上 n= 4	
「どちらかと言えば住み続けたくない」「将来、別の市町村に引っ越したい」理由	買い物が不便	42	12	2	5	2	3	2	68
	市内の移動(公共交通)が不便	18	14	2	4	4	3	0	45
	市外への移動(公共交通)が不便	11	4	1	4	2	1	1	24
	道路事情が悪い	16	3	4	2	0	6	2	33
	医療や福祉体制が不十分	4	1	1	3	3	2	0	14
	子育て支援が不十分	1	0	1	3	1	0	0	6
	教育環境が悪い	4	2	2	1	0	0	0	9
	町並みが悪い	7	1	1	1	0	0	0	10
	自然が少ない	3	0	4	2	0	0	1	10
	魅力的な職場がない	16	6	4	5	1	5	0	35
	近所づきあいが難しい	6	1	0	0	0	1	1	9
	余暇が楽しめないから	18	8	2	2	0	0	0	30
	愛着が持てない	11	3	0	2	1	0	2	19
	治安が悪いから	14	2	0	1	1	2	1	21
	その他	12	6	1	3	1	1	0	24



図表3. 36　年代別の転出予定

		引っ越すとしたら何年後か					合計
		1年以内	5年以内	10年以内	10年以上	わからない	
年代	19歳以下	8	31	7	0	32	78
	20代	2	14	3	1	6	26
	30代	0	1	2	1	8	12
	40代	0	8	4	1	4	17
	50代	1	2	1	0	3	7
	60代	2	2	0	1	5	10
	70歳以上	0	1	0	0	4	5
合計		13	59	17	4	62	155



３．まとめ

函館市に対するイメージ「きれい・おしゃれ」、「楽しそう」、「まわりの人がやさしそう」、「癒される」はいずれも８割程度であり、道内・道外を問わず、良好なイメージを持たれている。これらのイメージを持っている人は、函館への再訪希望、１週間以上の滞在希望が高く、加えて、函館に住みたいと思う人が多くなっている。観光による函館市に対するイメージアップが再訪希望、１週間以上の滞在希望から移住希望につながっていることがわかる。

函館に住みたいと思う人の理由では、ゆっくりできる・居心地の良さ、自然が豊か、食べ物がおいしい、活気がある・買い物に便利、街並みがきれい等の点が評価されている。

函館に住みたいと思う人は、住まう場所として西部地区を選んでおり、五稜郭方面、湯の川方面が続く。西部地区は道外、夫婦のみや未成年の子どもと同居、函館に対して「癒される」イメージを持っている人に人気がある。特に西部地区のＰＲが有効と思われる。

函館に住みたいと思う特に道外の人で冬の気候が不安に思われており、仕事、津波等の自然災害が続く。不安の解消に向けた相談窓口が必要である。転居歴がある人の多くは転居時に会社・就職先、家族・親族から情報を得ており、「観光等で行ったことがあった」や「自治体のＨＰ」はほとんどない。観光や自治体のＨＰだけではない情報提供が必要である。

転居時に受けた自治体の移住支援プログラムを見ると、空き家の紹介、移住体験プログラム等の利用は数％であった。移住支援プログラムにとどまらない対応策が求められる。

転居意向や転居予定者から実際に函館への移住の可能性を見ると、道内の２割前後、道外の１割は、函館に移住する可能性がある。函館市近郊よりも札幌市の方が多く、東北地方は１割前後、首都圏は数％である。20代前後と50代が多く、就職先、定年退職後の移住先として条件を整える必要がある。

函館市からの転居希望や転居予定は19歳以下、20代が多いが、これは道内・

道外でも同様の傾向が見られ、就職先や結婚のためと考えられる。若年層の転出は函館市だけのものではなく、転出者数に見合った転入がないことが人口減少を招いていると考えられる。

函館市民の定住希望者は理由として、愛着があるに加えて、自然が多い、街並みが良い、買い物が便利をあげている。これらは函館への移住希望者の理由と同じである。定住希望者が考える魅力は、移住希望者を引き寄せる魅力につながっている。函館市民に応じたまちづくりを実施すれば、移住者にも対応できると考えられる。

Ⅳ．リゾート地・七飯町（大沼地区）

１．外部からの七飯町への転入意向

（１）回答者基本属性

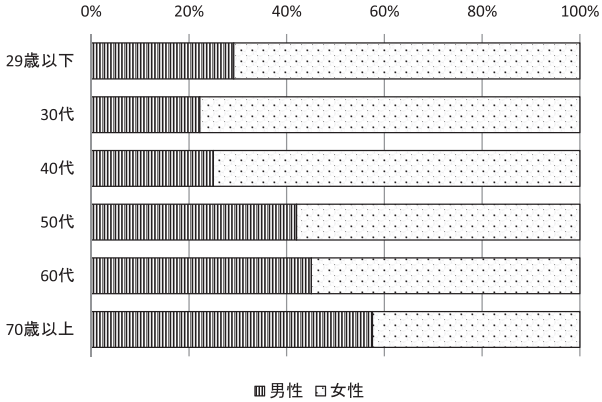
回答者数378。

男性157人（41.9％）、女性218人（58.1％）。女性がやや多い。

年代は29歳以下24人（6.4％）、30代18人（4.8％）、40代48人（12.7％）、50代90人（23.8％）、60代132人（34.9％）、70歳以上66人（17.5％）。60代が３割、50代が２割である。40代までで女性がやや多い【図表4.1】。

図表4.1　回答者基本属性（性別・年代）

		性別		合計
		男性	女性	
年代	29歳以下	7	17	24
	30代	4	14	18
	40代	12	36	48
	50代	37	51	88
	60代	59	72	131
	70代以上	38	28	66
合計		157	218	375



居住地は道内41人（10.9％）、道外334人（89.0％）。道内で女性が多い【図表4.2】。道内・道外で年代に大きな差は見られない。

家族構成は、一人暮らし65人（17.6％）、夫婦のみ167人（45.1％）、未成年の子どもと同居36人（9.7％）、その他102人（27.6％）。夫婦のみが４割を超える【図4.3】。

図表4.2　回答者基本属性（居住地）

		性別		合計
		男性	女性	
年代	道内	8	32	40
	道外	147	184	331
合計		155	216	371

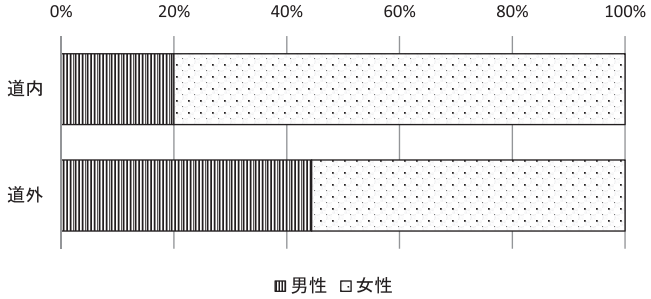
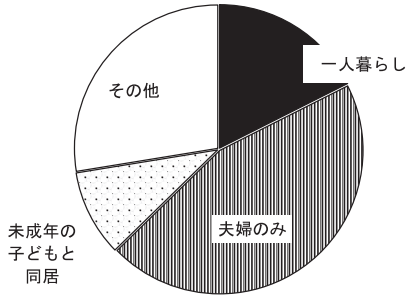


図4.3　回答者基本属性（家族構成）



（２）七飯町への長期滞在及び移住

七飯町に来たのは「はじめて」236人（64.5％）、「２、３回目」83人（22.7％）、「４回以上」47人（12.8％）。「はじめて」が６割である。道内の人は半数が「４回以上」であり、道外の人は７割が「はじめで」である【図表4.4】。

ちなみに近郊の函館に来たのは「はじめて」107人（29.1％）、「２、３回目」141人（38.3％）、「４回以上」120人（32.6％）である。

七飯町に１週間以上の長期滞在をしたいと思うか尋ねたところ、「してみたい」35人（9.8％）、「関心はある」136人（38.1％）、「関心はない」186人（52.1％）。「してみたい」が１割、「関心はある」が４割である。道内で「してみたい」人が多い【図表4.5】。性別、年代による差は見られない。

ちなみに函館に１週間以上の長期滞在をしたいと思うか尋ねると、「してみたい」105人（29.5％）、「関心はある」178人（50.0％）、「関心はない」73人（20.5％）。七飯町よりも「してみたい」、「関心はある」が多くなっている。

七飯町に住みたいと思うか尋ねたところ、「将来、移り住みたい」２人（0.6％）、「関心はある」98人（28.0％）、「関心はない」250人（71.4％）。移住希望者がおり、関心はあるが３割近い。道内・道外で大きな差は見られない【図表4.6】。性別、年代による差は見られない。

七飯町に「将来、移り住みたい」、「関心はある」人に住むとすればどこが良いか尋ねると「七飯町役場周辺」１人（1.0％）、「函館近郊」52人（49.5％）、「大沼公園周辺」33人（31.4％）、「わからない」19人（18.1％）。函館近郊が半数であり、大沼公園周辺も３割ある【図4.7】。

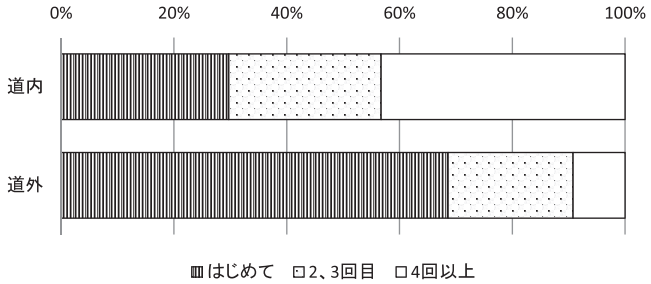
七飯町に「将来、移り住みたい」、「関心はある」人に住みたい理由を尋ねると99人の複数回答で「自然や景観」74人（74.7％）、「食べ物」32人（32.3％）、「地価や物価が安い」７人（7.1％）、「気候」20人（20.2％）、「交通の利便性」０人（0.0％）、「子育て支援（中学校卒まで医療費無料）」０人（0.0％）、「移住者が多い」１人（1.0％）、「北海道に住んでみたい」11人（11.1％）、「農業等がしたい」２人（2.0％）、「その他」２人（2.0％）。「自然や景観」が７割、

「食べ物」が３割である【図4.8】。

ちなみに近郊の函館に住みたい理由を尋ねると、287人の複数回答で「自然や景観」186人（64.8％）、「食べ物」140人（48.6％）、「地価や物価が安い」18人（6.3％）、「気候」47人（16.4％）、「交通の利便性」29人（10.1％）、「有料老人ホーム・高齢者住宅の選択肢が多い」０人（0.0％）、「温泉」71人（24.7％）、「北海道に住んでみたい」30人（10.5％）、「観光地で店等をしたい」３人（1.0％）。「自然や景観」は七飯町と変わらないが、「食べ物」が若干多い。

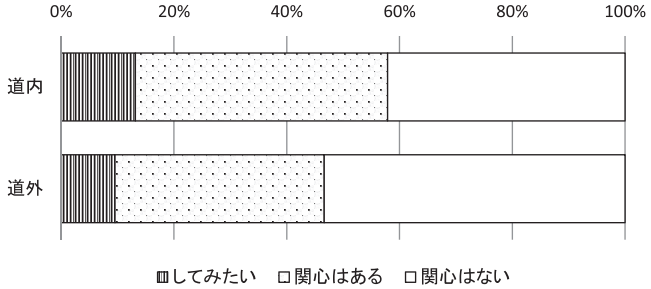
図表4.4　これまでに七飯町に来た回数

		居住地		合計
		道内	道外	
これまでに七飯町に来た回数	はじめて	11	223	234
	２、３回目	10	72	82
	４回以上	16	30	46
合計		37	325	362



図表4.5　七飯町への１週間以上の長期滞在希望

		居住地		合計
		道内	道外	
七飯町への長期滞在希望	してみたい	5	30	35
	関心はある	17	117	134
	関心はない	16	168	184
合計		38	315	353



図表4.6　七飯町への移住希望

		居住地		合計
		道内	道外	
七飯町への移住希望	将来、移り住みたい	2	0	2
	関心はある	9	89	98
	関心はない	27	219	246
合計		38	308	346

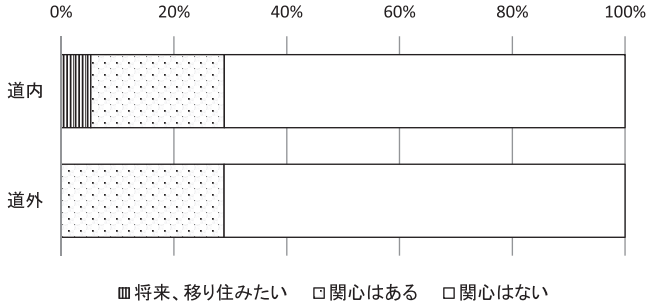


図4.7　七飯町への移住希望地区

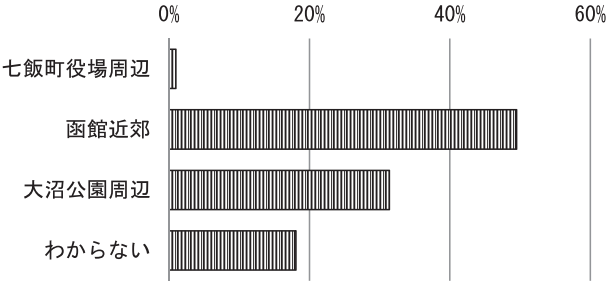
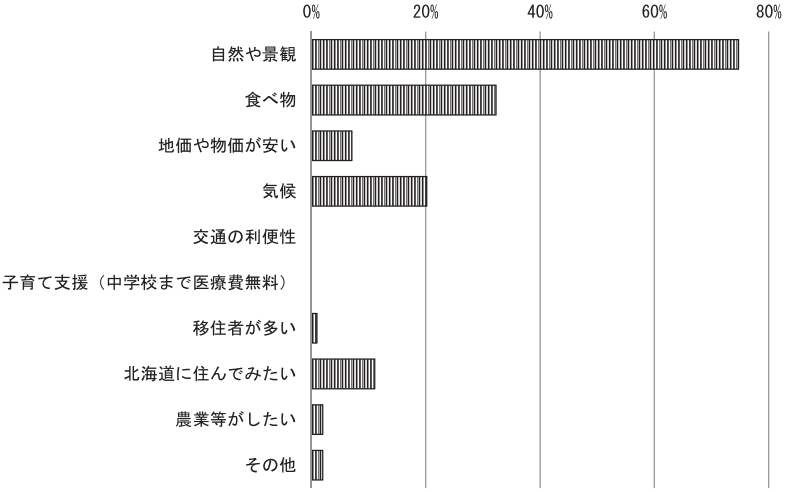


図4.8　七飯町への移住希望理由



（３）移住の条件

七飯町以外に移住するとすればどこが良いかと理由を尋ねると、七飯町に「将来、移り住みたい」、「関心がある」人は、函館（落ち着いている、ゆっくりした時間がすごせそう、食べ物がおいしい、気候がおだやか）、札幌（物価が安い、自然がある）、長野（自然が豊か）、東京（大都市）、横浜（港が好き）、沖縄（気候が温暖でのんびりしている）等をあげている。

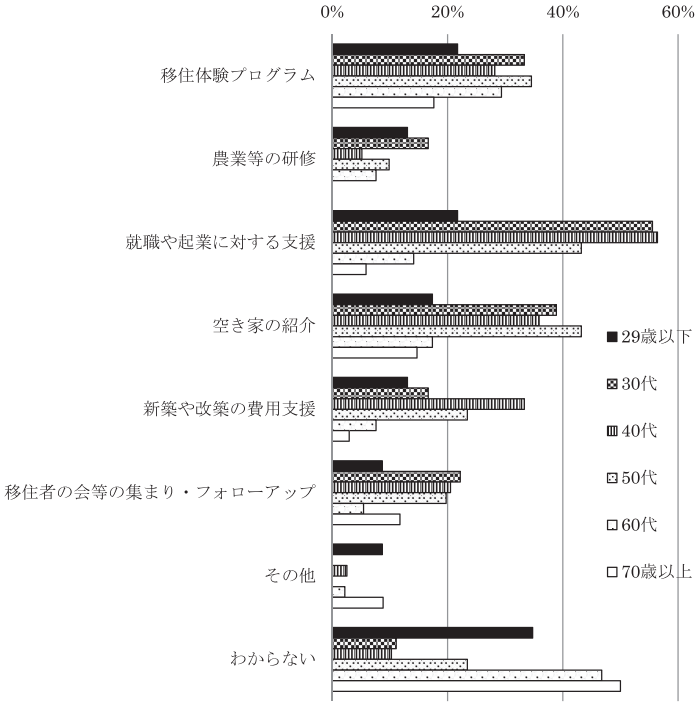
七飯町に「関心はない」人は、札幌（自然や景観、食べ物、交通の利便性が良い）、長野（自然豊かで東京都の利便性も良い）、東京（交通の利便性）、伊豆（温暖な気候）、京都（利便性）、神戸（気候、自然、物価安、利便性）、福岡（暖かく、食べ物がおいしそう）、熊本（食べ物、交通の便）、沖縄（気候が温暖でのんびりしている）等をあげている。

函館市は七飯町に「将来、移り住みたい」、「関心がある」人で候補にあがっているが、札幌、長野、東京、沖縄は両方にあり、いずれも気候や自然、交通の利便性等が理由としてあげられている。

移住のために必要なサービスは、287人の複数回答で「移住体験プログラム」83人（28.9％）、「農業等の研修」23人（8.0％）、「就職や起業に対する支援」87人（30.3％）、「空き家の紹介」81人（28.2％）、「新築や改築の費用支援」46人（16.0％）、「移住者の会等の集まり・フォローアップ」39人（13.6％）、「その他」６人（1.6％）、「わからない」93人（32.4％）。「就職や起業に対する支援」、「移住体験プログラム」、「空き家の紹介」が３割である。「その他」には地元住民との交流等があった。30～50代で「わからない」が少なくなり、「就職や起業に対する支援」、「空き家の紹介」が多くなる【図表4.9】。性別や居住地による差は見られない。

図表4.9　移住のために必要なサービス

		年代						合計
		29歳以下 n=23	30代 n=18	40代 n=39	50代 n=81	60代 n=92	70歳以上 n=34	
移住のために必要なサービス	移住体験プログラム	5	6	11	28	27	6	83
	農業等の研修	3	3	2	8	7	0	23
	就職や起業に対する支援	5	10	22	35	13	2	87
	空き家の紹介	4	7	14	35	16	5	81
	新築や改築の費用支援	3	3	13	19	7	1	46
	移住者の会等の集まり・フォローアップ	2	4	8	16	5	4	39
	その他	2	0	1	0	2	3	8
	わからない	8	2	4	19	43	17	93



（4）北海道新幹線開業による意識変化

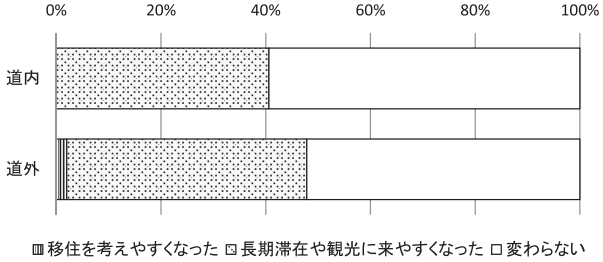
北海道新幹線開業による大沼地区への移住等の意識変化を尋ねると「移住を考えやすくなった」６人(1.8%)、「長期滞在や観光に来やすくなった」154人（45.6%)、「変わらない」178人（52.7%)。移住を考えやすくなった人は数%であるが、「長期滞在や観光に来やすくなった」が４割を超えている。道内・道外で差は見られない【図表4.10】。

１週間以上の長期滞在希望者の多くは「長期滞在や観光に来やすくなった」と答えている【図表4.11】。移住に「関心はある」人の多くは「長期滞在や観光に来やすくなった」と答えている【図表4.12】。

ちなみに北海道新幹線開業による近郊の函館への移住等の意識変化を尋ねると「移住を考えやすくなった」８人（2.3%)、「長期滞在や観光に来やすくなった」193人（55.9%)、「変わらない」144人（41.7%)。「移住を考えやすくなった」は七飯町と変わらず、「長期滞在や観光に来やすくなった」がやや多くなっている。

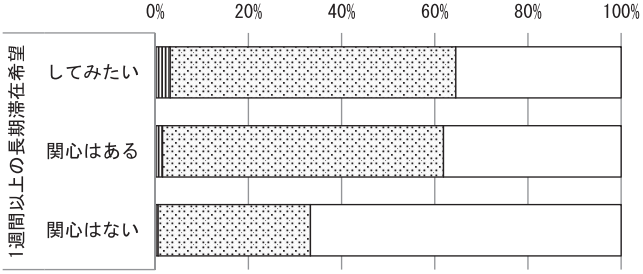
図表4.10　北海道新幹線開業による移住等の意識変化

		居住地		合計
		道内	道外	
開業による移住等の意識変化	移住を考えやすくなった	0	6	6
	長期滞在や観光に来やすくなった	13	139	152
	変わらない	19	158	177
合計		32	303	335



図表4.11　北海道新幹線開業による移住等の意識変化
（1週間以上の長期滞在希望別）

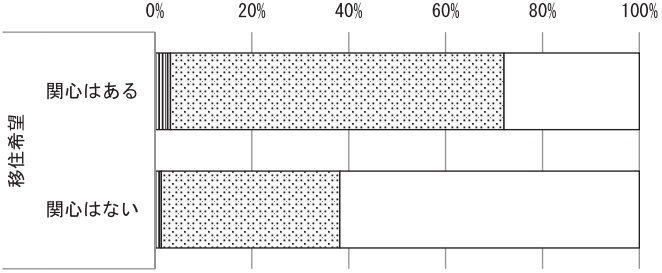
		1週間以上の長期滞在希望			合計
		してみたい	関心はある	関心はない	
開業による移住等の意識変化	移住を考えやすくなった	1	2	1	4
	長期滞在や観光に来やすくなった	19	76	55	150
	変わらない	11	48	112	171
合計		31	126	168	325



■開業による移住等の意識変化　移住を考えやすくなった
▨開業による移住等の意識変化　長期滞在や観光に来やすくなった
□開業による移住等の意識変化　変わらない

図表4.12　北海道新幹線開業による移住等の意識変化（移住希望別）

		移住希望		合計
		関心はある	関心はない	
開業による移住等の意識変化	移住を考えやすくなった	3	3	6
	長期滞在や観光に来やすくなった	64	84	148
	変わらない	26	141	167
合計		93	228	321



▥開業による移住等の意識変化　移住を考えやすくなった
▨開業による移住等の意識変化　長期滞在や観光に来やすくなった
□開業による移住等の意識変化　変わらない

2. 大沼地区への移住者インタビュー【表4. 13】

大沼地区への移住者４人に対してインタビューを行った。男性３人、女性１人、40～50代であり、移住から５～17年が経過している。職業は会社員、陶芸家でアルバイト、乳製品製造、畜産と様々である。このうち３人は北海道Ｓ町からの移住者であり、一部は移住前からの知り合いである。

いずれも農業希望者であり、農業系大学や専門学校、ニュージーランド、本で見つけたみかん農家等、農業を学ぶために移動している。その後、企業経営牧場に勤務したり、棚田オーナー制を利用して就農したりしている。北海道Ｓ町への移動はいずれも酪農を行っているＮＰＯでの農業研修である。

大沼地区への移住の動機は農業での独立であり、北海道に住みたいと思っていたり、近隣の函館出身や先に移住した人のところに遊びに行って大沼地区に親しみを感じていた。

移住時に、大沼地区の飲食店から自転車を借りたり、漁業協同組合で家やアルバイトを紹介してもらったり、牧場主に地主との交渉の間に入ってもらう等、大沼地区の人たちの手助けを受けている。飲食店、漁業協同組合、牧場はいずれも観光関連事業者であり、移住に向けて土地や家を探し歩く時に出合いやすかったと考えられる。

移住支援の課題について、外から移住先を探している段階では情報が少なく、一定期間借り住まいをする場所が必要になる。加えて、家や土地が見つかった時に地主との交渉にあたり、見知らぬ移住者との間に入ってくれる人が必要である。移住した後も、新たに農業で生計を成り立たせるには数年がかかり、その間、通年でアルバイトをさせてくれる等の手助けが必要である。

これらの手助けを観光関連事業者が行っている。一部の有志ではあるが、外から訪れる人を受け入れて地域の人や資源につないでいく役割を果たしていることが分かる。

移住者は以前手助けを受けたことから、後から移住を目指す人たちの相談にのったり、手助けをしたりしている。移住者が観光関連事業者とつながっ

て、次の外から訪れる人を受け入れる資源となっている。

表4.13　大沼地区移住者インタビュー

	Aさん　50代男性	Bさん　40代男性	Cさん　40代女性	Dさん　40代男性
移住年	1998年	2000年	2006年	2010年
移住前	北海道S町	高知県Y町	北海道S町	北海道S町
職業	会社員	陶芸家、アルバイト	乳製品製造	畜産（豚）
家族構成	子供2人、4人暮らし	子供3人、5人暮らし	子供3人、5人暮らし	子供2人、4人暮らし
移住までの転居歴	函館出身、大学は小樽、函館に就職。 結婚後、子供が3才の時、退職して農業を学びに1年間ニュージーランドへ。帰国後、北海道S町で2年間農業に従事、大沼地区へ。	函館出身、大学卒業後、農業がしたくて本で見つけた愛媛みかん農家の元へ。2年後、棚田オーナー制（4万円で1反賃貸）を利用して高知県で就農。5年後、大沼地区へ。	東京出身、農業系大学を卒業後、北海道の企業経営牧場に勤務。その後、酪農家を転々として、北海道S町の牧場で結婚。妊娠中に大沼地区へ。	神奈川出身、大学卒業後、北海道の農業専門学校へ。卒業後、北海道S町へ。農業研修で長野県、福島県をへて、東京で2年間レストランで働き、再び北海道S町へ。10年後、大沼地区へ。
移住の動機	農業で独立するため。函館出身で大沼地区を知っており、農業で生計を立てるには良さそうだと思った。	いずれ北海道に帰ってきたいと思っていた。農業ができる大沼地区へ。	結婚後、農業での独立を考えたため。消費地に近く、農業で生計が立てていけるところを探した。	農業で独立して北海道に住みたいと思っていた。Aさんと知り合いで、年1回くらい遊びに来ており、農業で生計が立てていけそうだと思った。
移住時の経緯	地元の牧場で3年間アルバイトをしながら農地を探したが、新規就農が難しかった。 空き地付の空き家を探して、持ち主に自分で連絡して探していた。 その経過で自治体窓口に行ったり、漁業協同組合、喫茶店、パン屋等に紹介してもらった。	地元喫茶店で自転車を貸してくれて、家を探した。漁業協同組合で家やアルバイトを紹介してもらった。じゅんさい採り、引網、ワカサギ釣りの手伝いなどをして現在は漁業協同組合会員になっている。	北海道S町に居ながら、農業担い手育成センター、自治体窓口等を訪ねて探していたが難しかった。地元飲食店から家を貸してもらい、泊って土地を探した。Bさんを紹介され、地主との間に入ってもらった。農業で生計が成り立つまで、漁業協同組合等でアルバイトをさせてもらった。	漁業協同組合に地主に手紙を書いてもらい、地元牧場に交渉の間に入ってもらった。同じ牧場で当初、アルバイトをさせてもらい、家族は飲食店でアルバイトをしていた。 Cさんとは北海道S町からの知り合いで販売先を紹介してもらった。地元材木店が家や畜舎の建設・改修にアドバイスをくれた。
移住支援の課題	当初、何の手がかりもなく空き地、空き家を見つけることが難しかった。移住時に紹介してもらったため、現在は他からの移住者の相談にのっている。	特にない。	移住先に泊まるところがない家や土地探しが難しい。地主との交渉も移住先にツテがないと難しい。農業で生計が成り立つまで3～5年程度通年でアルバイトをさせてくれる等、所得補償が必要になる。 移住時に助けてもらったため、現在は他からの移住者の相談にのっている。	移住や定住には地元で手助けをしてくれる人がないと難しい。情報が少ない。

3. まとめ

七飯町への観光客の中に移住希望者がおり、関心はあるが３割近い。移住希望者の３割が移住希望地区としてリゾート地・大沼公園周辺をあげている。移り住みたい理由は近郊の観光都市･函館と同様に「自然や景観」、「食べ物」等である。

１週間の以上の長期滞在をしてみたい・関心がある人が半数近くおり、長期滞在から移住に向けたプロセスも考えられる。

移住に対する支援として「就職や起業に対する支援」、「移住体験プログラム」、「空き家の紹介」があがっており、特に30～50代に対する取り組みが求められる。

北海道新幹線開業によって移住を考えやすくなった人は数％であるが､「長期滞在や観光に来やすくなった」が４割を超えている。特に１週間以上の長期滞在希望者や移住に関心を持つ人の多くが「長期滞在や観光に来やすくなった」と感じており、今後の展開が期待される。

実際に大沼地区に30～40代で移住した人のインタビューからは、観光関連事業者とかつての移住者のネットワークが移住希望者の窓口となって支援している様子が見て取れた。移住に向けて、土地や家を探すための仮住まいの提供、見知らぬ地主との間のつなぎ、生計が成り立つまでのアルバイトの提供等が行われており、前述のアンケートにある移住に対する支援「就職や起業に対する支援」、「移住体験プログラム」、「空き家の紹介」が有志の手で実施されている。

これらが連動して観光を通じて観光関連事業者と出会い､長期滞在や移住･定住へとつながっていく可能性が考えられる。

Ⅴ．離島・奥尻町

1．回答者基本属性

回答者数267。

道内148人、道外112人。道内のうち、奥尻町近郊の南北海道（渡島・檜山管内）は23人。道外は東北16人、関東48人、中部・北陸21人、近畿16人、中国・四国10人、九州・沖縄１人。

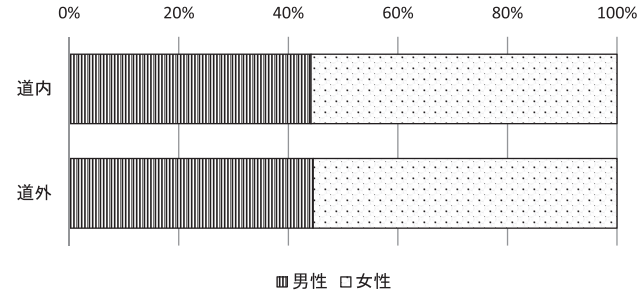
男性114人（43.8％）、女性145人（56.2％）。女性が若干多い。道内・道外で差は見られない【図表5.1】。

年代では、19歳以下４人(1.5％)、20代４人(1.5％)、30代12人(4.5％)、40代26人(9.8％)、50代44人(16.6％)、60代84人(31.7％)、70歳以上91人(34.3％)。60代と70歳以上で２／３近い。道内・道外で差は見られない【図表5.2】。

家族構成は、一人暮らし62人(23.9％)、夫婦のみ108人(41.7％)、未成年の子どもと同居33人(12.7％)、その他56人(21.6％)。夫婦のみが４割である。道内・道外で差は見られない【図表5.3】。

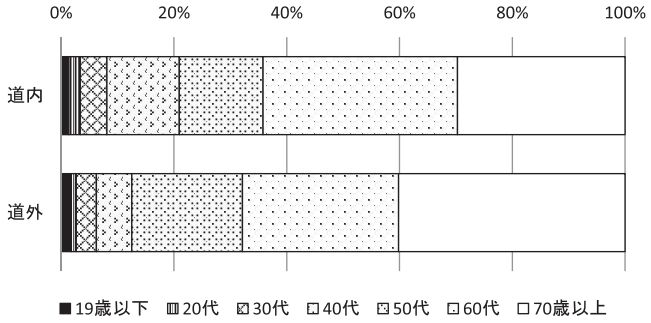
図表5.1　回答者基本属性（性別）

		居住地		合計
		道内	道外	
性別	男性	64	49	113
	女性	81	61	142
合計		145	110	255



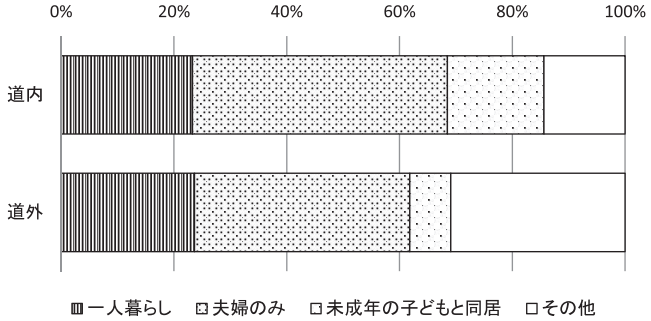
図表5.2　回答者基本属性（年代）

		居住地		合計
		道内	道外	
年代	19歳以下	2	2	4
	20代	3	1	4
	30代	7	4	11
	40代	19	7	26
	50代	22	22	44
	60代	51	31	82
	70代	44	45	89
合計		148	112	260



図表5.3　回答者基本属性（家族構成）

		居住地		合計
		道内	道外	
家族構成	一人暮らし	34	26	60
	夫婦のみ	66	42	108
	未成年の子どもと同居	25	8	33
	他	21	34	55
合計		146	110	256



2. 奥尻島に来た経験、今回の旅行

奥尻島に来た経験は、今回はじめて214人(81.7%)、2～3回目22人(8.4%)、4回以上26人（9.9%)。今回はじめてが8割である。道内の人で4回以上が1割あるが、ともに今回はじめてが多い【図表5.4】。

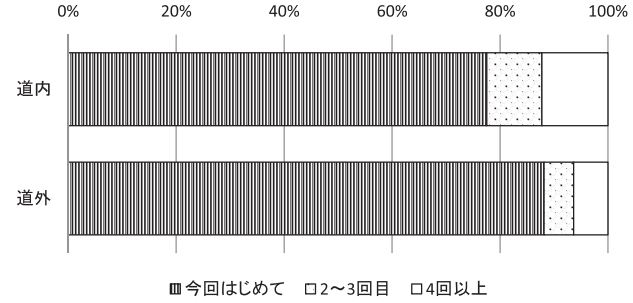
ちなみに北海道に来た経験は、今回はじめて13人（5.6%)、2～3回目4人（1.7%)、4回以上97人（42.0%)、北海道在住117人（50.6%)。北海道在住を除くと、4回以上が多い。何度も北海道に来ている人が、奥尻島を訪れている。

同行者は、「一人で」87人(35.5%)、「中学生までの家族や友人」21人(8.6%)、「高校生以上の家族や友人」131人（53.5%)、「会社等の団体」6人（2.4%)。「高校生以上の家族や友人」が半数であり、「一人で」も1／3を超えている。

奥尻島に来た目的は、観光・娯楽249人（97.6%)、仕事2人（0.8%)、その他4人（1.6%)。ほぼ観光・娯楽である。

図表5.4　奥尻島に来た経験

		居住地		合計
		道内	道外	
奥尻に来た経験	今回はじめて	114	97	211
	2～3回目	15	6	21
	4回以上	18	7	25
合計		147	110	257



3. 奥尻島で訪れたところ、観光情報の入手先等

奥尻島で訪れたところは256人の複数回答で、北国岬30人（11.7%）、復興の森53人（20.7%）、宮津弁天宮113人（44.1%）、賽の河原136人（53.1%）、球島山86人（33.5%）、鍋釣岩165人（64.5%）、うにまる公園66人（25.8%）、徳洋記念公園44人（17.2%）、奥尻津波館164人（64.1%）、西海岸（無縁島、ホヤ岩、モツ立岩、カブト岩等）105人（41.0%）、その他33人（12.9%）、いずれにも行かない20人（7.8%）。鍋釣岩、奥尻津波館が６割であり、賽の河原、宮津弁天宮が続く。その他はハイキングコース等であった。道内・道外でさほど差は見られない【図表5.5】。

奥尻島で体験するプログラムは196人の複数回答で、釣り２人（1.0%）、キャンプ１人（0.5%）、ブナ林の散策23人（11.8%）、島人ガイド17人（8.6%）、温泉108人（55.1%）、ワイナリーの見学103人（52.6%）、いずれも経験しない31人(15.8%)。温泉、ワイナリーの見学が半数を超えている。道内・道外を比べると、ワイナリーの見学は道内で多い【図表5.6】。

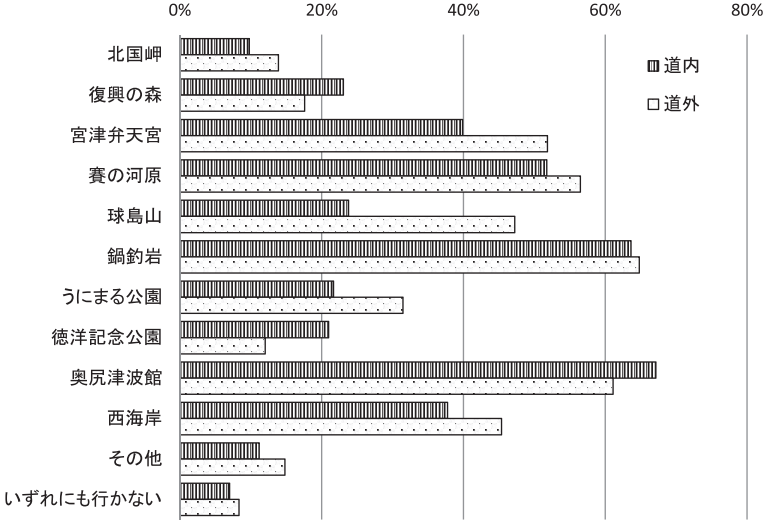
奥尻島の観光情報の入手先は239人の複数回答で、旅行代理店・ツアー140人（58.6%）、インターネット56人（23.4%）、観光雑誌・ガイドブック23人(9.6%)、家族･知人20人（8.4%）、その他７人（2.9%）、元から知っている26人(10.9%)。旅行代理店・ツアーが６割近く、インターネットが１／４程度である。道内・道外で差は見られない【図表5.7】。

奥尻島で買うお土産は198人の複数回答で、魚介類136人（68.7%）、お菓子56人（28.3%）、ワイン63人（32.0%）、その他の食品27人（13.7%）、衣類・雑貨１人（0.5%）、その他３人（1.5%）、何も買わない７人（3.6%）。魚介類が７割、ワイン、お菓子が３割である。その他には日本酒があった。道内・道外で差は見られない【図表5.8】。

奥尻島にまた来たいと思うか尋ねたところ、「また来たい」180人（79.6%）、「一度で良い」46人（20.4%）。また来たいが８割である。道内･道外で差は見られない【図表5.9】。

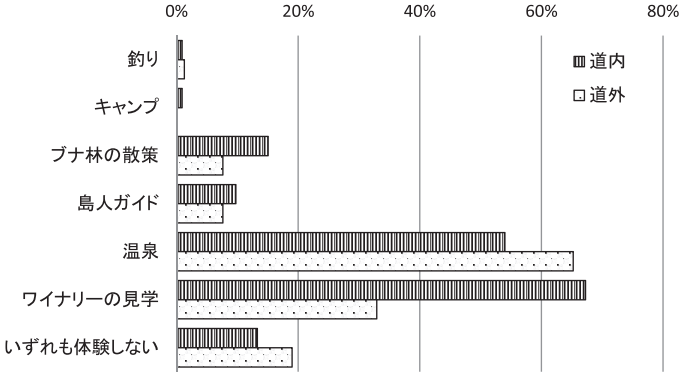
図表5.5　奥尻島で訪れたところ

		居住地		合計
		道内 n=143	道外 n=108	
奥尻島で訪れたところ	北国岬	14	15	29
	復興の森	33	19	52
	宮津弁天宮	57	56	113
	賽の河原	74	61	135
	球島山	34	51	85
	鍋釣岩	91	70	161
	うにまる公園	31	34	65
	徳洋記念公園	30	13	43
	奥尻津波館	96	66	162
	西海岸（無縁島、ホヤ岩、モツ立岩、カブト岩等）	54	49	103
	その他	16	16	32
	いずれにも行かない	10	9	19



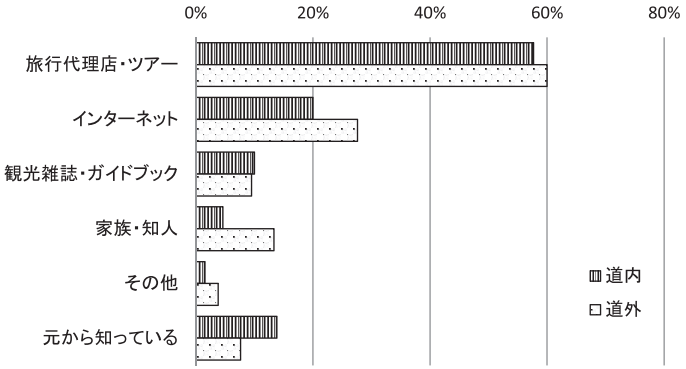
図表5.6　奥尻島で体験するプログラム

		居住地		合計
		道内 n=113	道外 n=79	
奥尻島で体験するプログラム	釣り	1	1	2
	キャンプ	1	0	1
	ブナ林の散策	17	6	23
	島人ガイド	11	6	17
	温泉	61	45	106
	ワイナリーの見学	76	26	102
	いずれも体験しない	15	15	30



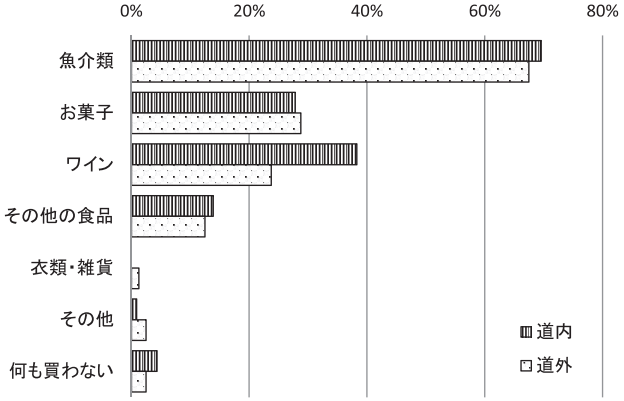
図表5.7　奥尻島の観光情報の入手先

		居住地		合計
		道内 n=130	道外 n=105	
奥尻島の観光情報の入手先	旅行代理店・ツアー	75	63	138
	インターネット	26	29	55
	観光雑誌・ガイドブック	13	10	23
	家族・知人	6	14	20
	その他	2	4	6
	元から知っている	18	8	26



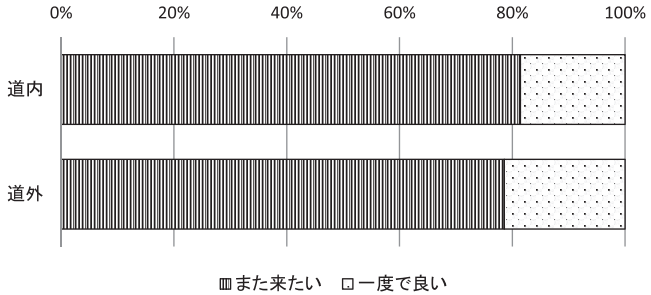
図表5.8　奥尻島で買うお土産

		居住地		合計
		道内 n=115	道外 n=80	
奥尻島で買うお土産	魚介類	80	54	134
	お菓子	32	23	55
	ワイン	44	19	63
	その他の食品	16	10	26
	衣類・雑貨	0	1	1
	その他	1	2	3
	何も買わない	5	2	7



図表5.9　奥尻島への再訪希望

		居住地		合計
		道内	道外	
また来たいか	また来たい	101	77	78
	一度で良い	23	21	44
合計		124	98	222



4. 奥尻島への移住意向

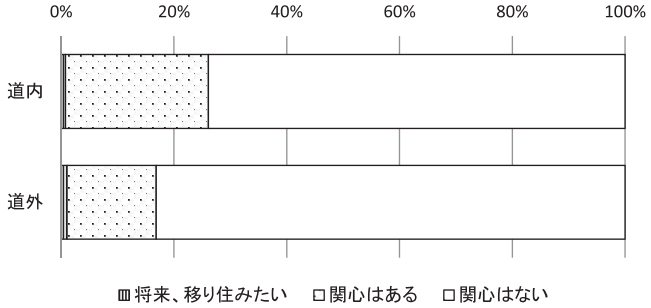
奥尻島に住みたいと思うか尋ねたところ、「将来、移り住みたい」２人（0.9％）、「関心はある」51人（21.9％）、「関心はない」180人（77.3％）。移住希望者が２人おり、「関心はある」人が２割である。道内･道外で差は見られない【図表5.10】。性別、年代による差は見られない。

奥尻島にまた来たいと思う人で、「関心はある」が多くなっている【図表5.11】。奥尻島に来た経験が多い人で、「関心はある」が多くなっている【図表5.12】。

奥尻島に住みたい理由は49人の複数回答で「自然や景観」42人（85.7％）、「食べ物」20人（41.7％）、「地価や物価が安い」２人（4.2％）、「気候」12人（25.0％）、「離島だから」７人（14.6％）、「仕事の紹介がある（農業･観光･建設業等）」１人（2.1％）、「釣り等のマリンスポーツができる」15人（30.6％）、「北海道に住んでみたかった」０人（0.0％）、「ワイン葡萄農家になりたい」３人（6.3％）、「その他」３人（6.1％）。自然や景観が多く、食べ物、釣り等のマリンスポーツが続く。一部に「ワイン葡萄農家になりたい」があり、奥尻島で進められているワイン会社による葡萄農家の立ち上げ支援の活用が期待される。居住地別に見ると、道内・道外で大きな差は見られず、北海道の気候も道外の人に問題とは考えられていないようである【図表5.13】。

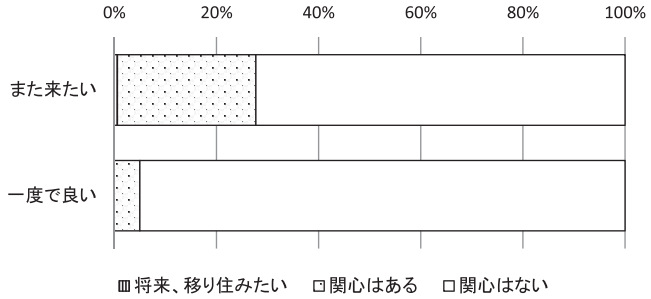
図表5. 10　奥尻島への移住希望

		居住地		合計
		道内	道外	
住みたいか	将来、移り住みたい	1	1	2
	関心はある	34	15	49
	関心はない	99	79	178
合計		134	95	229



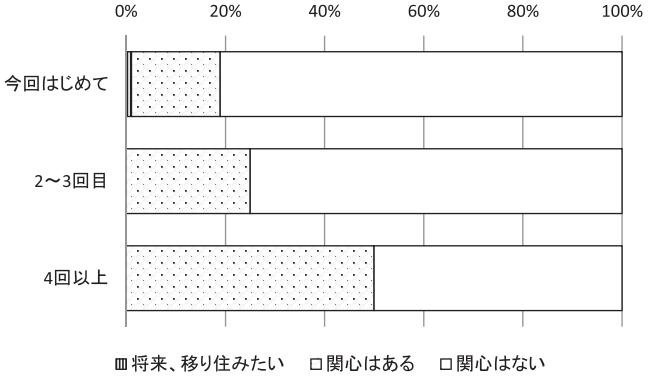
図表5. 11　奥尻島への再訪希望と移住希望

		住みたいか			合計
		将来、移り住みたい	関心はある	関心はない	
また来たいか	また来たい	1	45	120	166
	一度で良い	0	2	38	40
合計		1	47	158	206



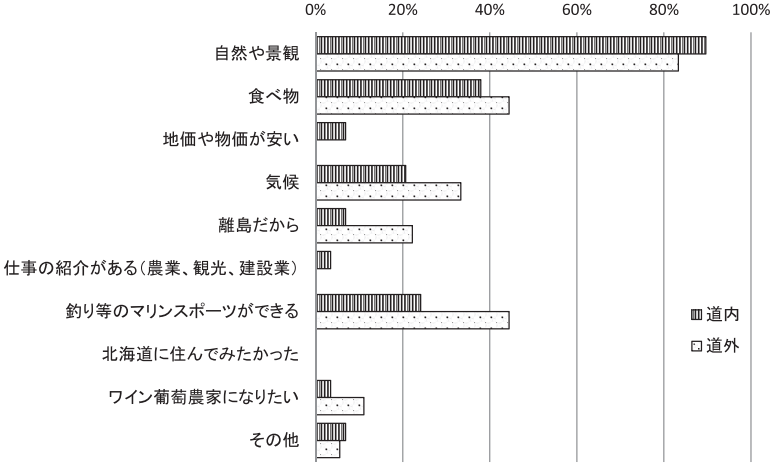
図表5. 12　奥尻島に来た経験と移住希望

		住みたいか			合計
		将来、移り住みたい	関心はある	関心はない	
奥尻に来た経験	今回はじめて	2	34	154	190
	2～3回目	0	4	12	16
	4回以上	0	12	12	24
合計		2	50	178	230



図表5. 13　奥尻島への移住希望理由

		居住地		合計
		道内 n=29	道外 n=18	
奥尻島に住みたい理由	自然や景観	26	15	41
	食べ物	11	8	19
	地価や物価が安い	2	0	2
	気候	6	6	12
	離島だから	2	4	6
	仕事の紹介がある（農業、観光、建設業）	1	0	1
	釣り等のマリンスポーツができる	7	8	15
	北海道に住んでみたかった	0	0	0
	ワイン葡萄農家になりたい	1	2	3
	その他	2	1	3



5. まとめ

道内･道外からの移住希望者がおり、「関心はある」人が２割である。性別、年代による差は見られない。

奥尻島に住みたい理由は「自然や景観」、「食べ物」、「釣り等のマリンスポーツ」が多い。観光でも奥尻津波館とともに、鍋釣岩や賽の河原等、自然や景観が楽しまれており、お土産では魚介類が購入されている。体験プログラムでは、温泉やワイナリーの見学が多いが、一部に釣り等がある。観光・娯楽で奥尻島を訪れて、奥尻島にまた来たいと思う人で、移住に関心がある人が多くなっており、観光が移住に向けたきっかけになっていると考えられる。一度の観光だけでなく、奥尻島に来た経験が多い人で、住みたい人が多くなっており、継続的な取り組みが求められる。

ワイナリーの見学が多く、移住によるワイン葡萄農家の希望者が生まれている。ワイン会社による葡萄農家の立ち上げ支援が期待される。

Ⅵ. まとめ

人口減少が顕著な北海道において、観光と移住促進の観点から可能性を探る調査を行った。

観光都市である函館市は、観光で培われた「きれい・おしゃれ」、「楽しそう」等の良好なイメージを再訪、１週間以上の長期滞在を通じて移住につなげていく可能性が考えられる。移住にあたっては、冬の気候等、住む上での不安な点に対応する相談窓口や、従来の移住支援プログラムにとどまらない支援施策が必要である。

なお、現在の函館市民の定住希望者と、外からの転入希望者が求める条件は共通しており、現在の市民のニーズに応じたまちづくりで移住者の定住への対応は可能である【図4. 1】。

リゾート地である七飯町の大沼地区は、観光客の中に移住希望者がおり、長期滞在希望者も一定程度あることから長期滞在から移住につながるプロセ

スも考えられる。特に長期滞在希望者や移住に関心のある人は、新幹線開業によって「長期滞在や観光に来やすくなる」と感じており今後が期待される。移住に向けて「就職や起業に対する支援」、「移住体験プログラム」、「空き家の紹介」が求められるが、すでに観光関連事業者とかつての移住者ネットワークによって、これらが実際に提供されている。観光関連事業者が観光を通じて移住希望者の窓口となり、観光と移住の間をつないでいくことが考えられる【図4. 2】。

離島である奥尻町は、頻回に訪れている人が移住に関心を持っている。移住希望者を引き付ける魅力は、「自然や景観」、「食べ物」、「釣り等のマリンスポーツ」であり、「自然や景観」は観光スポット、「食べ物」は魚介類のお土産等、「釣り等のマリンスポーツ」は体験プログラムとしていずれも観光を通じて知ることができる。

他方でワイン会社による葡萄農家立ち上げ支援が実施されており、観光でワイナリー見学する人が多く、葡萄農家の希望者があることから、今後が期待される【図4. 3】。

函館市、七飯町の大沼地区、奥尻町のいずれも観光が再訪、長期滞在等を通じた移住へのきっかけとなることがわかる。ただし、観光だけでは移住につながらず、函館市の相談窓口・移住施策、七飯町の大沼地区の観光関連事業者とかつての移住者ネットワーク、奥尻町のワイン会社のように観光から移住へのプロセスを支援する取り組みが必要である。

人口減少地域において観光は移住促進に向けた有効な一つの方法であるが、観光と移住をそれぞれに推進するのではなく、観光と移住をつなげる連動した取り組みが求められる。実際に有志や民間企業による取り組みが行われおり、今後、自治体との連携による推進が期待される。

図4.1　函館市の観光と移住促進

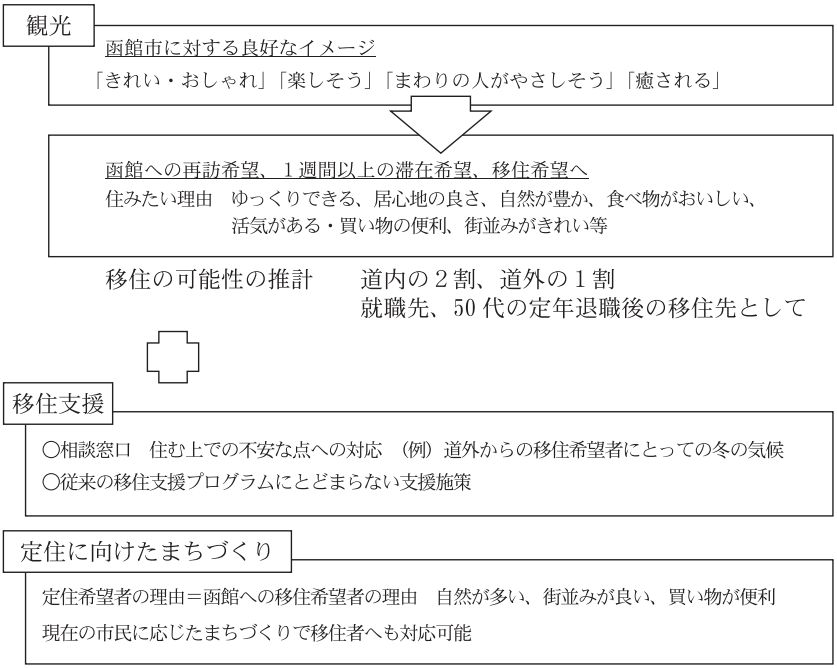


図4.2　七飯町の大沼地区の観光と移住促進

観光

観光客の中の移住希望者
長期滞在から移住につながる可能性

新幹線開業により「長期滞在や観光に来やすくなる」
特に長期滞在希望者、移住に関心のある人が感じている」

移住支援

【求められる支援】就職や起業に対する支援、移住体験プログラム、空き家の紹介等　特に 40 代まで

観光関連事業者とかつての移住者のネットワーク
移住希望者の窓口となって支援
○土地や家を探すための仮住まいの提供
○地主との見知らぬ間をつなぐ
○生計が成り立つまでのアルバイトの提供

図4.3　奥尻町の観光と移住促進

観光

再訪希望→頻回訪問→移住への関心へ
移住希望者の理由
「自然や景観」　＝観光スポット
「食べ物」　＝お土産等
「釣り等のマリンスポーツ」＝体験プログラム

ワイナリー見学→移住によるワイン葡萄農家の希望　ワイン会社による葡萄農家立ち上げ支援

移住

文献

1）増田寛也：地方消滅　－東京一極集中が招く人口急減、中公新書、2014
2）小田切徳美：農山村は消滅しない、岩波新書、2014
3）総務省：RMO（地域運営組織）による総合生活支援サービスに関する調査研究報告書、〈http://www. soumu. go. jp/main_content/000284562. pdf、2015. 3. 31確認〉、2014
4）移住・交流推進機構：「空き家バンク」を活用した移住・交流促進事業自治体調査報告書、〈http://www. iju-join. jp/akiyabank/akiyabank_report. pdf、2015. 3. 31確認〉、2014
5）まち・ひと・しごと創生本部：「東京在住者の今後の移住に関する意向調査」の結果概要、〈http://www. kantei. go. jp/jp/singi/sousei/souseikaigi/dai 1 /siryou2. pdf、2015. 3. 31確認〉、2014
6）内閣府：農山漁村に関する世論調査報告、〈http://survey. gov-online. go. jp/h26/h26-nousan/index. html、2015. 3. 31確認〉、2014
7）認定 NPO 法人ふるさと回帰支援センター：2014年度「100万人のふるさと回帰運動」都市と農山漁村の交流・移住実務者研修セミナー資料集、2015
8）山本努：過疎農山村研究の課題と過疎地域における定住と還流（Uターン）をめぐって　－中国山地農山村調査からの報告、県立広島大学経営情報学部論集 3 、pp. 69-82、2011
9）移住・交流推進機構：少子化対策自治体実態調査報告書、〈http://www. iju-join. jp/research/pdf/report2. pdf、2015. 3. 31確認〉、2015
10）桐山秀樹：北海道伊達市モデル　－この街は、なぜ元気なのか？、かんき出版、2008
11）日本創生会議・人口減少問題検討分科会　資料 2 - 1 全国市区町村別「20～39歳女性」の将来推計人口、〈http://www. policycouncil. jp/pdf/prop03/prop03_2_1. pdf、2015. 3. 31確認〉、日本創生会議、2014
12）七飯町：大沼地域活性化ビジョン　－住んでよいまち　訪ねてよいまち、2008